

2019 年度

授 業 計 画  
(シラバス等)

大阪行岡医療大学

# シラバスの利用方法

このシラバスは、受講する科目について、あらかじめ、担当教員が授業に関する情報を提供しておき、学習の効果を高めるために作られたものです。「授業科目概要」、「授業の目的」、「授業計画」、「教科書」、「参考文献」、「成績評価」の順番に授業に関する必要事項が明示されています。この一冊で受講科目の内容がすべてわかるようになっていきますので、よく読んで有効に活用してください。

## 1. 受講科目を登録する前に

選択科目を登録する時に、科目名だけで判断するのではなく、「科目目標」及び「授業内容」をよく読んで、自分の学ぼうとしている科目がどのようなものであるかを確認してください。

## 2. 受講の前に

「授業計画」には授業開始から終了までの計画が示されていますので、授業全体の進度や展開の流れを知るうえで、参考になります。授業を受けようとする時、前もってその「授業計画」を知っておくと、学習効果がいつそう高まります。予習の内容や方法、準備しておくべきもの、留意事項等についてあらかじめ知っておくことが大切です。受講の前には必ず読んでおいてください。

## 3. 受講中に

シラバスは担当者が前もって作成するものですから、学習の状況によっては、授業の内容や進度などが修正されることもありますので注意してください。

## 4. 受講の後に

受講後に授業内容を復習する時、ノートの整理をする時などにもう一度読み返してみることも必要です。また、授業を欠席した場合にも、その時の授業が何についてであったかを把握できます。

## 5. 卒業後に

卒業後、就職や進学をする時の提出書類に、在学中に履修した科目内容について記載を求められることがありますので大切に保存しておいてください。

## 目 次(カリキュラム表)

※平成28年度以降入学者

科目区分	掲載ページ	授業科目の名称	配当年度	単位数			授業形態			学年別 単位数											
				必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	1前	1後	2前	2後	3前	3後	4前	4後				
教養教育科目	心身の理解	6	心理学	1前	2			○													
		7	健康スポーツ科学	1前	1				○												
		8	心の健康と運動	1後	1				○												
	コミュニケーションの理解	9	人間関係学	1後	2				○												
		10	英語コミュニケーションⅠ	1前	1					○											
		11	英語コミュニケーションⅡ	1後	1	1				○											
		12	医学英語	2後	1					○											
		13	キャリアセミナー	1通	1					○											
		14	統計学	1前	2					○											
		15	情報処理演習	1前	1					○											
		16	脳と心	1後	1	2				○											
		科学の理解と社会環境	17	法学	1後	2	2			○											
	18		社会福祉学	1前	2				○												
	19		栄養学	1前	2	2			○												
	20		生化学	1前	2	2			○												
	21		公衆衛生学	2後	2				○												
	22		生命倫理	2後	1				○												
小計(17科目)				—	17	9	0	—													
専門基礎科目	人体の構造と機能	23	運動器系解剖学	1前	4			○													
		24	内臓系解剖学	1後	2			○													
		25	神経系解剖学	1前	2			○													
		26	運動器系生理学	1後	3			○													
		27	内臓系生理学	2前	3			○													
		28	解剖学実習	1後	1						○										
		29	生理学実習	2後	1						○										
		30	人間発達学	2前	1				○												
		31	運動学	1後	3				○												
		疾病と障害の成り立ち及び回復過程の促進	32	病理学	2後	2				○											
	33		臨床心理学	2前	2				○												
	34		内科学	2後	2				○												
	35		整形外科学	2後	2				○												
	36		神経内科学	3前	1				○												
	37		精神医学	3前	2				○												
	38		小児科学	3前	2				○												
	39		脳神経外科学	3前	2				○												
	40		救急医学	2前	1					○											
	41		薬理学	3前	1	1				○											
	42		臨床検査学	3前	1	1				○											
	43		スポーツ傷害学	3前	1	1				○											
	44		ペインリハビリテーション	3後	2					○											
	45		老年期障害学	3前	1					○											
	46		発達障害学	3後	2					○											
	保健医療とリハビリテーション		47	リハビリテーション医学	2後	2				○											
		48	生活支援学(リハビリテーション工学)	1後	2	2			○												
		49	チーム医療学	2前	1				○												
		50	感染対策	1前	1				○												
		51	医療安全学	2後	1				○												
	小計(29科目)				—	44	7	0	—												
											必修科目17単位		選択科目6単位以上選択								
										必修科目44単位		選択科目4単位以上選択									

科目区分	掲載ページ	授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			学年別 単位数								
				必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	1前	1後	2前	2後	3前	3後	4前	4後	
専門科目	基礎理学療法	52 理学療法概論	1前	2			○				2							
		53 運動療法学	1後	1			○					1						
		54 運動療法学演習	2前	1				○					1					
		55 物理療法学	1後	1			○						1					
		56 物理療法学演習	2前	1				○						1				
		57 日常生活活動学	2後	1			○								1			
	58 日常生活活動学演習	3前	1				○								1			
	障害の評価	59 理学療法評価学	1後	2			○					2						
		60 運動器障害評価法Ⅰ	2前	1				○					1					
		61 運動器障害評価法Ⅱ	2前	1				○					1					
		62 神経障害評価法	2後	1				○						1				
		63 内部障害評価法	3前	1				○							1			
		64 臨床運動学演習	2前	1				○					1					
	理学療法各論	65 運動器障害理学療法	3前	1			○								1			
		66 運動器障害理学療法演習	3前	1				○							1			
		67 脳機能障害理学療法	3前	1			○								1			
		68 脳機能障害理学療法演習	3前	1				○							1			
		69 内部障害理学療法	3後	1			○									1		
		70 内部障害理学療法演習	3後	1				○								1		
		71 発達障害理学療法	3後	1	1			○								1		
		72 神経筋障害理学療法	3後	2			○									2		
		73 脊髄障害理学療法	3後	1			○									1		
		74 地域リハビリテーション	3前	2			○								2			
		75 老年期障害理学療法	3後	1			○									1		
		76 スポーツ傷害理学療法	3後		1		○									1		
		77 理学療法特論	4後		1		○											1
		78 義肢補装具学	3後	2			○									2		
	79 理学療法学総合演習Ⅰ	3前	1				○							1				
	80 理学療法学総合演習Ⅱ	3後	1				○								1			
	81 総括セミナーⅠ	4前	1				○									1		
	82 総括セミナーⅡ	4後	1				○										1	
	83 理学療法研究	4前		2		○										2		
	臨床実習	84 臨床体験実習	2前	1						○								
		85 臨床評価実習	3後	3						○								
		86 臨床総合実習Ⅰ	4前	6						○							6	
		87 臨床総合実習Ⅱ	4後	8						○								8
小計(36科目)			-	51	5	0	-	-	-	23	23	14	16	20	18	9	10	
合計(82科目)			-	112	21	0	-	-	-	小計	46	30	38	19				
										合計	133							

### GPA(グレード・ポイント・アベレージ)算出方法

GPA = (GP × 単位数) の合計 / 総単位数 (履修登録単位数)

	成績評価	GP(グレード・ポイント)
優	100-90点	4
	89-80点	3
良	79-70点	2
可	69-60点	1
不可	59-0点	0

	1年	2年	3年	4年
必修	35	30	31	16
選択	11	0	7	3
小計	46	30	38	19
合計	133			

卒業要件及び履修方法
教養教育科目の必修17単位及び選択6単位以上、専門基礎科目の必修44単位及び選択4単位以上、専門科目の必修51単位及び選択2単位以上の合計124単位以上を修得し、卒業試験に合格すること。

履修科目の登録の上限
1年 46単位(年間)
2年以降 38単位(年間)
成績優秀者は上限がなくなります。

履修及び進級要件
1) 原則として、各学年において必修科目のGPAが1.5以上かつ未修得科目が2科目以下の場合には進級できる。留年の場合は、選択科目は単位認定するが、必修科目は全て再履修とする。進級者においても必修の未修得科目は次年度に再履修すること。
2) 「臨床評価実習」を履修するにあたり、「臨床体験実習」を修得しておかなければならない。「臨床総合実習」を履修するにあたり、3年次までの全必修科目96単位を修得しておかなければならない。

## 目 次 (カリキュラム表)

※平成27年度以前入学者

科目区分	掲載ページ	授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			学年別 単位数									
				必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	1前	1後	2前	2後	3前	3後	4前	4後		
	-	基礎ゼミナール	1前	0			○												
教養 教育 科目	心と身体 の理解	-	心理学概論	1前	2			○											
		-	体育実技	1通	1					○									
		-	健康スポーツ科学	1後	1				○										
		-	心の健康と運動	1後	2				○										
	コミュニケーション と情報の理解	-	人間関係論	1後	2			○											
		-	学びと表現	1前	1				○										
		-	文学	1前	1	2			○										
		-	英語Ⅰ	1前	1					○									
		-	英語Ⅱ	1後	1					○									
		-	英語表現	1後	1	1				○									
		-	医学英語	2後	1					○									
		-	統計学	1前	2				○										
		-	キャリアガイダンス	1前	1				○										
		-	キャリアセミナー	4前	1				○										
		-	情報処理演習	1前	1						○								
		-	コンピューター応用演習	1後	1	1					○								
		-	脳と心	1後	2				○										
	科学と社会 環境の理解	-	社会学	1後		2			○										
		-	法学概論	1後		2			○										
		-	歴史学	1前		2			○										
		-	社会福祉学概論	1前		2			○										
		-	環境学	1前		2			○										
		-	栄養学	1前		2			○										
		-	物理学概論	1前		2			○										
		-	生化学	1後		2			○										
		-	公衆衛生学	2後		2			○										
		-	生命倫理	2後		2			○										
小計 (27科目)			-	21	22	0		-											
専門 基礎 科目	人体の構造 と機能	-	運動器系解剖学	1前	4			○											
		-	内臓系解剖学	1後	2			○											
		-	運動器系生理学	1後	3			○											
		-	内臓系生理学	2前	3			○											
		-	解剖学実習	2前	1						○								
		-	生理学実習	2後	1							○							
		-	人間発達学	2前	2				○										
		-	運動学	2前	3				○										
	疾病と障害の 成り立ち及び 回復過程 の促進	-	病理学	2後	2				○										
		-	臨床心理学	2前	2				○										
		-	内科学	2後	2				○										
		-	整形外科	2後	2				○										
		-	神経内科学	3前	2				○										
		-	精神医学	3前	2				○										
		-	小児科学	3前	2				○										
		-	脳神経外科学	3前		2			○										
		-	救急医学	2前	1						○								
		-	臨床検査論	3前		2				○									
		-	スポーツ傷害論	3前		2				○									
		-	疼痛論	3後		2				○									
		-	老年期疾病論	3前		1					○								
	-	発達障害論	3後		2				○										
	保健医療と リハビリテー ション	-	リハビリテーション医学	1後	2				○										
		-	リハビリテーション工学	1後		2			○										
		-	チーム医療論	2前	1				○										
		-	感染対策	1前	1				○										
		-	医療安全学	2後	1				○										
小計 (27科目)			-	40	12	0		-											

科目区分	掲載ページ	授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			学年別 単位数									
				必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	1前	1後	2前	2後	3前	3後	4前	4後		
専門科目	基礎理学療法	理学療法概論	1前	2			○			必修科目54単位 選択科目5単位以上選択	2								
		運動療法学	2前	2			○												
		運動療法学演習	2後	1				○					2						
		物理療法学	2前	2			○								1				
		物理療法学演習	2後	1				○						2					
		日常生活活動学	2後	2			○									1			
		日常生活活動学演習	3前	1				○									1		
	障害の評価	障害診断論	1後	2			○						2						
		骨格系障害評価法	2前	1				○							1				
		筋系障害評価法	2前	1				○							1				
		神経系障害評価法	2後	2				○								2			
		呼吸器障害評価法	3前	1				○									1		
		循環代謝障害評価法	3前	1				○									1		
		臨床運動学演習	2後	1				○							1				
	理学療法各論	骨・関節障害理学療法	3前	2				○								2			
		中枢神経障害理学療法	3前	2				○								2			
		神経筋障害理学療法	3後		2			○									2		
		呼吸器障害理学療法	3後	1				○									1		
		循環代謝障害理学療法	3後	1				○									1		
		発達障害理学療法	3後		1			○									1		
		老年期障害理学療法	3後		1			○									1		
		スポーツリハビリテーション	3後		2			○									2		
		地域リハビリテーション	3前		2			○									2		
		義肢補装具学	3前	2				○									2		
		義肢補装具療法	3後	1					○								1		
		理学療法学総合演習Ⅰ	3前	1					○								1		
	理学療法学総合演習Ⅱ	3後	1					○								1			
	臨床実習	臨床体験実習	2前	1							○			1					
		臨床評価実習	3後	3							○						3		
		臨床総合実習Ⅰ	4前	6							○							6	
		臨床総合実習Ⅱ	4後	8							○							8	
	研究卒業	理学療法研究論	3前	1				○									1		
		卒業研究	4通	4					○										4
小計 (33科目)			—	54	8	0	—	—	—	28	27	20	20	26	17	7	12		
合計 (87科目)			—	115	42	0	—	—	—	小計	55	40	43	19					
										合計	157								

学位又は称号	学士(理学療法学)
学位又は学科の分野	保健衛生学関係 (リハビリテーション関係)

	1年	2年	3年	4年
必修	31	40	25	19
選択	24	0	18	0
小計	55	40	43	19
合計	157			

授業期間等	
1 学年の学期区分	2 学期
1 学期の授業期間	15 週
1 時限の授業時間	90 分

卒業要件及び履修方法
教養教育科目の必修21単位及び選択6単位以上、専門基礎科目の必修40単位及び選択2単位以上、専門科目の必修54単位及び選択5単位以上の合計128単位以上を修得すること。

履修科目の登録の上限
1年 50単位(年間) 2年以降 42単位(年間) 成績優秀者は上限がなくなります。

履修及び進級要件
1) 「臨床評価実習」を履修登録するにあたり、「臨床体験実習」を修得しておかねばならない。 2) 4年次に進級し、「臨床総合実習Ⅰ」「臨床総合実習Ⅱ」「卒業研究」を履修登録するにあたり、「キャリアセミナー」「臨床総合実習Ⅰ」「臨床総合実習Ⅱ」「卒業研究」を除き、3年次までに開講している全必修科目を含む109単位を修得しておかねばならない。

科 目 名	心理学
担 当 教 員	高井 範子
単位、必修・選択	2単位 必修
履修対象・形態	1年次 前期 講義
授 業 科 目 概 要	本科目においては、人間の行動や心のしくみを理解するために、心理学各分野の基礎的知識を講義する。日常観察される人間の行動に関心を持ち、観察し、考察する態度を養い、日々の生活および医療の現場で活用できることを目指す。具体的には、人間の行動を促す動機、感覚と知覚、学習と記憶、脳と心、対人関係、パーソナリティ、健康行動、ライフサイクル、代表的な心理療法などについて講義する。
授 業 の 目 的	心理学はこころの学問であるが、心理学を学ぶということは、人間そのものについての多角的理解を深めることでもある。人間の心と身体がいかに密接に関連しているかを含めて、自己理解や他者（患者）理解、洞察力を深め、さまざまな心理的・身体的状況を生きておられる患者様に対してより良い治療を行なうために、心理学の基礎知識を身につけることを目的とする。
授 業 計 画	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 心理学とは何か：心理学の歴史， 医療と心理学</li> <li>2. 医療人として他者を支える姿勢の基礎学習（ピア・サポートについて）</li> <li>3. 感覚と知覚</li> <li>4. 記憶</li> <li>5. 学習：学習理論（古典的条件づけ， オペラント条件づけ）</li> <li>6. 脳と心：心の生物学的基礎</li> <li>7. 動機づけ， 対人関係：対人認知， 医療現場における応用</li> <li>8. パーソナリティ：特性論， 類型論</li> <li>9. ストレスおよびパーソナリティと健康との関連</li> <li>10. 健康心理学の視点から：健康行動と生活習慣</li> <li>11. 知能と創造性および情動の知性</li> <li>12. ライフサイクルと青年期：心の発達段階と発達課題</li> <li>13. 心理療法1：精神分析療法・認知行動療法</li> <li>14. 心理療法2：心理療法の応用領域</li> <li>15. まとめ</li> </ol>
教 科 書	毎回の授業においてプリント配布
参 考 文 献	『医療行動科学のためのミニマム・サイコロジー（シリーズ 医療の行動科学 I）』山田富美雄（編），北大路書房，1997. 『心の理論－心を読む心の科学』（岩波科学ライブラリー），子安増生，岩波書店，2000.
成 績 評 価	前期試験（60%），授業時に提出するコメントおよびレポート（40%）により総合的に評価する。受講にあたって，予習・復習を十分行うこと。

科 目 名	健康スポーツ科学
担 当 教 員	栗田 剛寧
単位、必修・選択	1単位 必修
履修対象・形態	1年次 前期 演習
授 業 科 目 概 要	運動の実践が健康に及ぼす影響についてスポーツ科学的観点から理解する。 スポーツやレクリエーションを通じ積極的な身体活動に取り組む。
授 業 の 目 的	様々な身体活動や体力測定等を通じ自身の体力やからだについてのきづきを高め、日常生活における運動の重要性の理解を深める。また、チームスポーツやレクリエーションを通じ、チームワーク形成に不可欠なコミュニケーションスキルを体と心で習得する。健康維持のために必要な基礎知識を習得する。
授 業 計 画	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 健康とは スポーツ科学とは</li> <li>2. 体力の概念</li> <li>3. トレーニングの原則</li> <li>4. コンディショニング</li> <li>5. 筋力向上のためのトレーニング</li> <li>6. 持久力向上のためのトレーニング</li> <li>7. プログラムデザイン</li> <li>8. 傷害予防とファーストエイド</li> <li>9. バスケットボール</li> <li>10. バドミントン</li> <li>11. 卓球</li> <li>12. フットサル</li> <li>13. アルティメット</li> <li>14. ソフトラクロス</li> <li>15. 体力テスト</li> </ol>
教 科 書	必要に応じて資料を配布する。
参 考 文 献	なし
成 績 評 価	授業中の意見・質問、提出レポートにより評価する。 受講にあたって、予習・復習を十分行うこと。



科 目 名	心の健康と運動
担 当 教 員	中原 英子
単位、必修・選択	1単位 必修
履修対象・形態	1年次 後期 講義
授 業 科 目 概 要	精神的ストレスや身体的ストレスが病気の原因や誘因となる事はよく知られている。しかし、運動や生活活動にみられる身体的ストレスは適度に行った場合にはかえって健康に貢献する。すなわち、適度のストレスは健康を維持するために必要である。本講義では、ストレスによる生体反応について口述し、さらにストレス緩和方法と言われている技法が生体に与える影響について教授する。
授 業 の 目 的	日常生活にとどまらず、社会的に存在するストレス要因を心理学的な手法でとらえるだけでなく、その社会的背景要因を考察し、ストレスに対応する手立てを考える。まずは日常生活で経験される事象や社会、学校や職場に関連した事象などを例示しながら、解説する。ストレスによる生体反応を具体的に解説しながら、その捉え方を知り、普段と違う身体的事象を理解する。
授 業 計 画	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. ストレスと病気</li> <li>2. うつ病、不安と運動</li> <li>3. 心肺機能と運動</li> <li>4. 筋肉とその働き</li> <li>5. 筋肉の種類と神経支配</li> <li>6. 運動と疲労、免疫、オーバートレーニング</li> <li>7. 睡眠障害、メラトニン、ストレス対処法</li> <li>8. 呼吸法、セロトニン、メラトニン</li> </ol>
教 科 書	講義に関連した資料を随時配布する。
参 考 文 献	講義内で紹介する。
成 績 評 価	後期試験、小レポートから、総合的に評価する。 受講にあたって、予習・復習を十分行うこと。

科 目 名	人間関係学
担 当 教 員	高井 範子
単位、必修・選択	2単位 必修
履修対象・形態	1年次 後期 講義
授 業 科 目 概 要	現代は人間関係を築くことが難しい時代であるといわれる。また、人間関係で悩む人も多い。対人援助サービスではあらゆる年齢層の患者に対応しなければならない。また、医療スタッフ間の人間関係、さらに日常生活における自己を取り巻く人間関係のあり方は、患者対応において直接的、間接的に大きな影響を与える。本科目においては、発達段階的視点、社会的視点、医療の視点を含む様々な人間関係を取り上げ、医療人として適切な患者対応が可能となるよう、多角的な視点から人間関係を考察する。また、コミュニケーションスキルを身につけるためのロールプレイングをも実施する。
授 業 の 目 的	医療や社会福祉などの対人援助サービスの人間関係においては、患者との信頼関係を構築するためにコミュニケーションスキルは不可欠である。本科目においては、①発達段階的視点や社会的視点における様々な人間関係について学び、その特徴を理解する。②他者（患者）受容をはじめとして、より良い人間関係を構築するために役立つ知識や技能を理解する。③信頼される医療人となるためにロールプレイングをとおしてコミュニケーションスキルを身につけることを目的とする。
授 業 計 画	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 人間関係学を学ぶにあたって：さまざまな人間関係と自己との関連</li> <li>2. 発達の視点からみた人間関係Ⅰ：乳幼児期の親子関係</li> <li>3. 発達の視点からみた人間関係Ⅱ：幼児期から成人期における人間関係</li> <li>4. 医療現場においてよりよい人間関係を構築するための自己理解</li> <li>5. 職業からみた人間関係：職場の人間関係</li> <li>6. 人間関係の悩みとその克服：人間関係に関する悩み、さまざまな対処法</li> <li>7. 臨床心理学的視点からみた人間関係：対人関係に関連した精神病理</li> <li>8. 人間関係における非言語行動：ロールプレイング（ピア・サポートに向けて）</li> <li>9. 対人援助サービスで活かすカウンセリングの知識と技法</li> <li>10. 親密な人間関係：恋愛の心理，対人認知要因</li> <li>11. 医療現場に活かすヘルス・コミュニケーション</li> <li>12. 健康増進のヘルス・コミュニケーションⅠ：ロールプレイング</li> <li>13. 健康増進のヘルス・コミュニケーションⅡ：振り返り</li> <li>14. 専門家と受益者の人間関係：医療者と患者の人間関係</li> <li>15. まとめ</li> </ol>
教 科 書	『発達・社会からみる人間関係－現代に生きる青年のために（第3版）』，西垣悦代（編），北大路書房，2009.
参 考 文 献	『人を育む人間関係論－援助専門職として，個人として』，服部祥子，医学書院，2003.
成 績 評 価	後期試験（60%），レポート（20%），授業コメントと授業中の課題（20%）等を総合的に評価する。毎回の予習・復習をしっかりとっておくこと。

科 目 名	英語コミュニケーション I
担 当 教 員	仲渡 一美
単位、必修・選択	1単位 必修
履修対象・形態	1年次 前期 演習
授業科目概要	文化、医療、健康、環境、歴史、生物学、心理学、科学技術などのジャンルから選んだ興味深いトピックを題材に、英語の読解力と自ら考える力を養います。また、ビジネスに必要な語彙、表現を学ぶことで、日常・医療現場など多様な場面に対応できる基礎的な英語運用能力とコミュニケーション能力を身につけます。
授業の目的	<ul style="list-style-type: none"> <li>・現代環境をとりまく問題について英語で情報を得て考える力をつける。</li> <li>・リスニングや基本的なライティング、スピーキング練習を行い日常や医療現場でも応用できる実践的英語の基礎力を身につける。</li> <li>・コミュニケーションのための演劇演習において言語表現を学ぶ。</li> </ul>
授業計画	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. Unit 1: Pleased to meet you.</li> <li>2. Unit 2: Do you remember me?</li> <li>3. Unit 3: I spoke to Ms. Hayashi yesterday.</li> <li>4. Unit 4: When does the meeting start?</li> <li>5. Unit 5: Can you meet me at the airport?</li> <li>6. Unit 6: Feel free to ask me anything.</li> <li>7. Unit 7: I' m thinking about quitting my job.</li> <li>8. 中間テスト・演劇（英語劇）パフォーマンスについて</li> <li>9. Unit 8: I' ll give her your message.</li> <li>10. Unit 9: I haven' t received the latest figures.</li> <li>11. Unit 10: The Cafeteria is closed today.</li> <li>12. Unit 12: I' d like to talk about our latest model.</li> <li>13. 演劇ワーク準備・音読テスト</li> <li>14. 演劇ワーク</li> <li>15. 復習</li> </ol>
教科書	『Let's Read Aloud & Learn English』 角山照彦 Simon Capper (株)成美堂 第7版 2015年
参考文献	補助教材、参考文献は授業中にプリントを配布します。
成績評価	前期試験60%と、小テスト、発表など授業への参加度40%を合わせて総合的に評価します。受講にあたって、予習・復習を十分行うこと。

科 目 名	英語コミュニケーションⅡ
担 当 教 員	仲渡 一美
単位、必修・選択	1単位 選択
履修対象・形態	1年次 後期 演習
授 業 科 目 概 要	医療従事者が実際の臨床現場において英語で対応できるよう、語彙、文法、スピーキング、リスニングなどを学び総合的な英語力を身につけます。また、理学療法に関わる症例の基礎的な用語を学びます。さらに様々なジャンルのエッセイを読み、内容に関して自ら考える力を養い、学習者同士で話し合い、プレゼンをすることでコミュニケーション能力を高めます。
授 業 の 目 的	<ul style="list-style-type: none"> <li>・医療現場で特にPTに必要とされる基本医療学用語を習得する。</li> <li>・コミュニケーションのための4技能の基礎を固める。</li> <li>・自ら学び考え、発見した知見を発信する力をつける。</li> </ul>
授 業 計 画	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. Chapter 1: Welcoming a Patient</li> <li>2. Chapter 2: Taking Vital Signs</li> <li>3. Chapter 3: Pain Assessment</li> <li>4. Chapter 4: Feeling So sick</li> <li>5. Chapter 5: Transferring a Patient</li> <li>6. Chapter 6: Medical Departments</li> <li>7. Chapter 7: <b>Review Test</b> &amp; Medical Terminology</li> <li>8. Chapter 8: Personal Care</li> <li>9. Chapter 9: Chronic Diseases</li> <li>10. Chapter 10: Critical Care / Operating Room</li> <li>11. Chapter 11: まとめと医学英文読解</li> <li>12. プレゼンと基本と準備</li> <li>13. プレゼンテーション</li> <li>14. プレゼンテーション</li> <li>15. 復習</li> </ol>
教 科 書	『Talking with Your Patients in English』平野美津子 Christine D. Kuramoto 落合亮太 成美堂 2019年
参 考 文 献	補助教材、参考文献は授業中にプリントを配布します。
成 績 評 価	担当章についての発表、プレゼンなど平常点40%と後期試験60%を合わせて総合的に評価します。受講にあたって、予習・復習を十分行うこと。

科 目 名	医学英語
担 当 教 員	仲渡 一美
単位、必修・選択	1単位 必修
履修対象・形態	2年次 後期 演習
授 業 科 目 概 要	医学・医療の基本である人体の主要な組織と中心に、各組織や器官について出来るだけ簡潔な英語を学習する。
授 業 の 目 的	秀れた医療従事者を目指し、世界の様々な人々とのコミュニケーションに役立つ英語を身に付け、そのものへの理解・関心を一層深める事の出来る講義を実施する。
授 業 計 画	1. The Human Body : 人体 2. The Skeletal System : 骨格系 3. The Muscular System : 筋系 4. The Circulatory System : 循環器系 5. The Lymphatic System : リンパ系 6. The Respiratory System : 呼吸器系 7. The Digestive System : 消化器系 8. The Urinary System : 泌尿器系 9. The Nervous System : 神経系 10. The Sense Organ : 感覚器系 11. Endocrine / Exocrine System : 内分泌系 / 外分泌系 12. The Reproductive System : 生殖器系 13. Aging and the end of life : 加齢と人生の終焉 14. Description of the English paper : 英語論文の書き方 15. Appendix : 追記・補足
教 科 書	『医療従事者のための医学英語入門 初版』/清水雅子 著/講談社/2011年3月10日
参 考 文 献	なし
成 績 評 価	後期試験（記述式） 受講にあたって、予習・復習を十分行うこと。

科 目 名	キャリアセミナー
担 当 教 員	助川 明、鶴崎 智史、栗田 剛寧
単 位、必 修・選 択	1 単 位 必 修
履 修 対 象・形 態	1 年 次 通 年 演 習
授 業 科 目 概 要	自己実現や社会貢献ができる社会人になるために大学生活における学習や人間関係の構築について理解する。また講義内容の要約やグループ討議を行う。コミュニケーション能力の向上のため日常の学習内容の整理・報告を行い、模範となる形式を習得する。学内・外でのボランティア活動など、社会に参加する上で、特に理学療法士を目指す学生として必要とされるマナーや接遇の講義を取り入れ、大学生活の早期から幅広く人や社会への関連を深めていく。理学療法士業務の理解を進めるため、病院の見学を行う。
授 業 の 目 的	社会人、医療人としての望まれる言動について、自ら考え、実行していく意識を高める。将来、理学療法士として働くことを念頭に置き、勤務する現場を見学し、必要とされる能力を考える。また、学生生活のあり方を考える機会とする。
授 業 計 画	以下の項目に演習を加えて通年で行う。要約レポートを作成する習慣を作る。 学外施設の見学及びそれに伴うオリエンテーション・準備には必ず出席すること。 1. 学習レポートの作成、提出と保管について (助川・鶴崎・栗田 他) 2. 意見・情報交換の基礎 (助川・鶴崎・栗田) 3. 個人情報保護について (助川・鶴崎・栗田) 4. 前社会人としてのマナー・接遇の基礎、掃除の習慣化 (助川・鶴崎・栗田) 5. 医療機関、医療専門職、利用者の意図と目的 (鶴崎・栗田) 6. 医療機関での学生の態度と行動：見学オリエンテーション (鶴崎・栗田) 7. 医療機関の見学〔グループ単位〕 (鶴崎・栗田) 8. 情報入手と発信と学生生活・ボランティア体験 (助川・鶴崎・栗田) 9. 高齢者の通所サービスで求められるコミュニケーション(助川・鶴崎・栗田)
教 科 書	『PT・OT のための これで安心 コミュニケーション実践ガイド 第2版』/山口美和/医学書院/2016年
参 考 文 献	なし
成 績 評 価	複数の課題レポートにより総合評価する。 受講にあたって、予習・復習を十分行うこと。

科 目 名	統計学
担 当 教 員	幸田 利敬
単位、必修・選択	2単位 必修
履修対象・形態	1年次 前期 講義
授業科目概要	<p>統計学の基本的な概念を理解した上で仮説検定や推定の方法論を学習することを目的とする。学習目標は統計を用いて表現されたものを理解できるようになることと統計学的にデータ整理ができることである。</p> <p>具体的には①代表値と分布、②平均値の差の検定、③比率の差の検定、④回帰分析、⑤適合度の検定など、医療や保健分野に比較的多用されている統計手法について学習をすすめ、医療情報の信頼性や有用性を考える能力を養う。</p>
授業の目的	<p>統計学は、医学の分野でも非常に多く活用されている。大量のデータをわかりやすく表現し、有効な情報を得るためにも必須のツールとなる。そのため医療従事者が統計学の知識と活用法を知っておく必要がある。統計学の基礎を身につけ、将来の学習や研究のためにも統計学的手法を知る必要がある。統計学を医学へ応用するための初歩的な考え方と活用手段を身につけることが目的である。</p> <p>授業には、必ず電卓（四則演算、ルート計算、メモリー機能のあるもの）を持参すること。前授業の復習と練習問題は必ず実施すること。</p>
授業計画	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 統計学概論、統計学に必要な基礎数学</li> <li>2. データのまとめと表現（作表、作図）</li> <li>3. 記述統計①</li> <li>4. 記述統計②</li> <li>5. データの尺度・標本分布</li> <li>6. 正規分布と標準偏差</li> <li>7. 統計的仮説検定の基礎</li> <li>8. 統計的仮説検定の基礎</li> <li>9. 検定の基礎－差の検定①</li> <li>10. 検定の基礎－差の検定②</li> <li>11. 検定の基礎－差の検定③</li> <li>12. 検定の基礎－分割表検定①</li> <li>13. 検定の基礎－分割表検定②</li> <li>14. 検定の基礎－相関・回帰分析①</li> <li>15. 検定の基礎－相関・回帰分析②</li> </ol>
教科書	『PT・OTのための統計学入門』/三輪書店
参考文献	なし
成績評価	<p>前期試験により評価する。</p> <p>受講にあたって、予習・復習を十分行うこと。</p>

科 目 名	情報処理演習
担 当 教 員	三井 哲裕
単位、必修・選択	1単位 必修
履修対象・形態	1年次 前期 演習
授 業 科 目 概 要	パソコンを使わない生活がありえない現在、自分で必要な情報をパソコンを使って取り出せることや、情報を発信できることは、大切な技術である。パソコンでデータから情報を取り出し、それを文章や表・グラフ等で発表できる技術を学ぶ。
授 業 の 目 的	Wordを使い、文章の検索や編集技術、イラスト・写真・表等のオブジェクトの編集が出来るようになる。PowerPointで、簡潔な発表資料をつくりプロジェクタによる表示ができるよう操作を学ぶ。Excelではデータの表・グラフの作成・表示ができ、分析ツールも使えるようになり、Word、PowerPointのファイルにリンクして使えるようになる。研究発表に必要な技術を身に付けることを目的とする。
授 業 計 画	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. パソコンの基本操作とセキュリティ 安全対策</li> <li>2. Wordの入力法 オブジェクト 図形の作成 図形の編集</li> <li>3. 文章の編集 箇条書き 段組 縦書き・横書き ページ設定</li> <li>4. 書式に合わせた文章作り 出力（印刷、PDF、Web ページ）</li> <li>5. Excelの基本(セルへの数値・文字入力、計算式の入力)フィルハンドル</li> <li>6. Excelでグラフの作成</li> <li>7. Excelの関数の基礎 セルの表示形式</li> <li>8. Excelの日付関数と作表(予定表、カレンダー) ユーザー定義の利用</li> <li>9. 分析ツールの操作法 度数分布表とヒストグラム 乱数発生</li> <li>10. PowerPointでスライドに文字入力、クリップアートの入力</li> <li>11. PowerPointでアニメーション効果、スライドデザインを使う</li> <li>12. PowerPointでスライドショーを行う プロジェクタの知識</li> <li>13. Excelの表・グラフをWordの文章に貼り付ける</li> <li>14. PowerPointのスライドを、WordとExcelで作った資料を使って作成する</li> <li>15. 総復習</li> </ol>
教 科 書	『Windows7・Office2010による情報処理入門 Windows7   Word   Excel   PowerPoint』/安積淳, 八野真弓/実教出版/2010年
参 考 文 献	なし
成 績 評 価	前期試験（パソコンの実習試験） 受講にあたって、予習・復習を十分行うこと。



科 目 名	脳と心																														
担 当 教 員	三雲 真理子																														
単 位、必 修・選 択	2 単 位 選 択																														
履 修 対 象・形 態	1 年 次 後 期 講 義																														
授 業 科 目 概 要	近年、脳の活動を測定する技術のめざましい進歩とともに、我々の多様なこころの働きを脳から理解することが可能になりつつある。どのようにして目で見えたものが何であるかがわかるのか。どのようにして記憶し、なぜ忘れるのか。どのようにして考えたり、しゃべったりするのか。感情はどこから生まれるのか。人間のこのような精神活動と脳（神経）構造・機能との関連性について理解を深める。																														
授 業 の 目 的	私達は脳で見たり、聞いたり、味わったり、においを捉えたりしています。また喜び、怒り、悲しみ、楽しみ、悩みなどの心の動き（感情）も脳で起こります。脳の基本的構造や働きについて理解を深め、脳の精密さ、生命の神秘に触れ、普通に生活を送ることができる喜びを感じてください。また、脳の障害により不自由な生活を送られている方が、どのような辛さ、不便さを抱えておられるか、少しでも理解できるような心を育んでください。																														
授 業 計 画	<table border="1"> <tr> <td>1. 1. 脳の構造と働き</td> <td>1-1. 脳の3段階構造と心身相関</td> </tr> <tr> <td>2.</td> <td>1-2. 脳幹の構造と働き</td> </tr> <tr> <td>3.</td> <td>1-3. 大脳辺縁系の構造と働き</td> </tr> <tr> <td>4.</td> <td>1-4. 大脳辺縁系の構造</td> </tr> <tr> <td>5. 2. 脳の細胞と情報の伝達</td> <td>2-1. 神経細胞と情報伝達</td> </tr> <tr> <td>6.</td> <td>2-2. 神経伝達物質</td> </tr> <tr> <td>7. 3. 大脳皮質の働き</td> <td>3-1. 機能局在が明瞭な感覚野と運動野(1)-(3)</td> </tr> <tr> <td>8.</td> <td>3-1. 機能局在が明瞭な感覚野と運動野(4)-(6)</td> </tr> <tr> <td>9.</td> <td>3-2. 機能局在が不明瞭な連合野(1)-(3)</td> </tr> <tr> <td>10.</td> <td>3-2. 機能局在が不明瞭な連合野(4)-(6)</td> </tr> <tr> <td>11. 4. 右脳と左脳</td> <td>4-1. 大脳半球機能差</td> </tr> <tr> <td>12.</td> <td>4-2. 男女の脳の違い</td> </tr> <tr> <td>13. 5. 睡眠と脳波</td> <td>5-1. 脳波測定について</td> </tr> <tr> <td>14.</td> <td>5-2. 睡眠段階と脳波</td> </tr> <tr> <td>15.</td> <td>5-3. レム睡眠とノンレム睡眠</td> </tr> </table>	1. 1. 脳の構造と働き	1-1. 脳の3段階構造と心身相関	2.	1-2. 脳幹の構造と働き	3.	1-3. 大脳辺縁系の構造と働き	4.	1-4. 大脳辺縁系の構造	5. 2. 脳の細胞と情報の伝達	2-1. 神経細胞と情報伝達	6.	2-2. 神経伝達物質	7. 3. 大脳皮質の働き	3-1. 機能局在が明瞭な感覚野と運動野(1)-(3)	8.	3-1. 機能局在が明瞭な感覚野と運動野(4)-(6)	9.	3-2. 機能局在が不明瞭な連合野(1)-(3)	10.	3-2. 機能局在が不明瞭な連合野(4)-(6)	11. 4. 右脳と左脳	4-1. 大脳半球機能差	12.	4-2. 男女の脳の違い	13. 5. 睡眠と脳波	5-1. 脳波測定について	14.	5-2. 睡眠段階と脳波	15.	5-3. レム睡眠とノンレム睡眠
1. 1. 脳の構造と働き	1-1. 脳の3段階構造と心身相関																														
2.	1-2. 脳幹の構造と働き																														
3.	1-3. 大脳辺縁系の構造と働き																														
4.	1-4. 大脳辺縁系の構造																														
5. 2. 脳の細胞と情報の伝達	2-1. 神経細胞と情報伝達																														
6.	2-2. 神経伝達物質																														
7. 3. 大脳皮質の働き	3-1. 機能局在が明瞭な感覚野と運動野(1)-(3)																														
8.	3-1. 機能局在が明瞭な感覚野と運動野(4)-(6)																														
9.	3-2. 機能局在が不明瞭な連合野(1)-(3)																														
10.	3-2. 機能局在が不明瞭な連合野(4)-(6)																														
11. 4. 右脳と左脳	4-1. 大脳半球機能差																														
12.	4-2. 男女の脳の違い																														
13. 5. 睡眠と脳波	5-1. 脳波測定について																														
14.	5-2. 睡眠段階と脳波																														
15.	5-3. レム睡眠とノンレム睡眠																														
教 科 書	毎回の授業においてプリント配布																														
参 考 文 献	なし																														
成 績 評 価	後期試験 70%、提出レポート 30%から総合的に評価する。 受講にあたって、予習・復習を十分行うこと。																														

科 目 名	法学
担 当 教 員	戸浦 雄史
単位、必修・選択	2単位 選択
履修対象・形態	1年次 後期 講義
授業科目概要	「法」の網の目は社会制度のすみずみにまで張りめぐらされていますので、それに関する知識は、一般市民が日常的に社会生活を送るにあたっても不可欠ですが、とりわけ医療関係者の職業生活にとっては重要になります。では実際にみなさんの将来のどこで役に立つのか？それを知りたいと思った人は、ぜひこの授業を受けてみてください。わたしたちの生活や医療をとりまく法制度についての知識とその使い方について、具体例を中心にできるだけわかりやすい授業にしたいと思っています。ただし授業の内容は受講者のみなさんの関心や理解度などによって変更しますので、下記の授業計画は一応の目安だと思ってください。
授業の目的	法的知識の基礎とその使い方を身につける
授業計画	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. イントロ：何のために「法学」を学ぶのか</li> <li>2. 法学入門1：法律「関係」と法分野</li> <li>3. 法学入門2：「法源」論と法手続</li> <li>4. 公法概論1：憲法と人権</li> <li>5. 法学入門3：近代法システムの全体像</li> <li>6. 民法概論1：民法の全体像</li> <li>7. 民法概論2：財産法と家族法</li> <li>8. 民法概論3：法律行為と成年後見</li> <li>9. 民法概論4：物権と債権</li> <li>10. 民法概論5：契約と不法行為</li> <li>11. 公法概論2：行政法の全体像</li> <li>12. 公法概論3：社会保険制度と行政法</li> <li>13. 医事法概論1：医事法の全体像</li> <li>14. 医事法概論2：医療に関わる組織と資格</li> <li>15. 医事法概論3：医療行為と責任</li> </ol>
教科書	『医療・福祉を学ぶ人のための法学入門』／初版／久保純一・長沼建一郎・森田慎二郎（編）／法律文化社／2012
参考文献	『医事法入門』／第5版／手嶋豊／有斐閣アルマ／2018 『コ・メディカルのための医事法学概論』／初版／野崎和義／ミネルヴァ書房／2011
成績評価	授業中に課す課題と後期試験によって評価する 受講にあたって、予習・復習を十分行うこと

科 目 名	社会福祉学
担 当 教 員	助川 明
単 位、必 修・選 択	2 単 位 必 修
履 修 対 象・形 態	1 年 次 前 期 講 義
授 業 科 目 概 要	社会福祉の理念や制度を学習し、21 世紀をむかえての社会福祉の動向と価値および倫理を考察する。社会福祉援助の実施機関や援助方法について理解する。また、理学療法の実践にかかわる領域での社会福祉への関心を高めるため、3 人組でキーワードを調べてパワーポイントで発表を経験する。希望する者は、福祉住環境コーディネーター3 級の資格を取得し、より実践の知識に近づく事をすすめる。
授 業 の 目 的	現代では社会福祉の領域は非常に広範囲にわたっており、私たちの生活のさまざまな面にかかわっている。このような社会福祉の根底を貫く原理を理解するとともに、理学療法士にとって必要な社会福祉についての基本的な知識を習得することが目標である。福祉住環境コーディネーター3 級のテキストも活用し、実践的な知識を効率的に習得する。
授 業 計 画	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 社会福祉の基礎概念 ジェンダー 援助原理 ノーマライゼーション</li> <li>2. 社会福祉をとりまく状況 介護問題 現代の貧困 ワーキングプア</li> <li>3. 社会福祉の仕組みと運営 社会福祉六法 社会福祉の財政</li> <li>4. 社会保障・公的扶助 公的年金 医療保険制度 生活保護</li> <li>5. 医療保険制度と介護保険制度</li> <li>6. ケアマネジメント 地域包括ケアシステム</li> <li>7. 生活保護の種類 原理 施設</li> <li>8. 高齢者福祉の理念 法律 施設</li> <li>9. 障害者福祉 分類 法律 障害者総合支援法</li> <li>10. セルフヘルプグループ リハビリテーション</li> <li>11. 子ども家庭福祉 関連3 法 児童虐待 ひとり親家庭 女性への福祉的支援</li> <li>12. 地域福祉 ボランティア NPO バリアフリー コミュニティケア</li> <li>13. 社会福祉の援助と方法 ソーシャルワーク ケースワーク グループワーク</li> <li>14. これからの社会福祉の課題 専門職</li> <li>15. 総括</li> </ol>
教 科 書	『よくわかる社会福祉 第 11 版』/山縣文治・岡田忠克 編 /ミネルヴァ書房 /2016 年
参 考 文 献	『福祉住環境コーディネーター検定試験 3 級公式テキスト 改訂 5 版』/東京商工会議所/2019 年
成 績 評 価	<ul style="list-style-type: none"> <li>・前期試験期間中に試験を実施(70 点)</li> <li>・平常点等(30 点)</li> <li>・平常点解説：レポート感想等。私語、教科書なしはその回分はゼロ点。</li> <li>・受講にあたって、予習・復習を十分行うこと。</li> </ul>

科 目 名	栄養学
担 当 教 員	福井 紀子
単位、必修・選択	2単位 選択
履修対象・形態	1年次 前期 講義
授 業 科 目 概 要	<p>栄養とは何か。口から入った食物が、どのような経路をたどり栄養になっていくのか。</p> <p>基本的な栄養の概念を学び、臨床の現場における“チーム医療”に理学療法士がどのようにかかわっていくのかを学ぶ。</p>
授 業 の 目 的	<p>基本的事項である栄養の概念、栄養素の構造と機能、摂食行動、消化・吸収された栄養素がどのように代謝・利用されていくのか。</p> <p>五大栄養素について理解し、リハ栄養の中心にあるフレイルやサルコペニアの予防に向き合っていける知識を身につける。</p> <p>また、疾病別の食事療法の概念を学ぶ。</p>
授 業 計 画	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 栄養とは。三大栄養素と五大栄養素</li> <li>2. 糖質について</li> <li>3. タンパク質について</li> <li>4. 脂質について</li> <li>5. ビタミンとミネラル①</li> <li>6. ビタミンとミネラル②</li> <li>7. 食物繊維と水</li> <li>8. 栄養補給法①</li> <li>9. 栄養補給法②</li> <li>10. 食事療法について①</li> <li>11. 食事療法について②</li> <li>12. 栄養アセスメント①</li> <li>13. 栄養アセスメント② NST 活動の実際</li> <li>14. リハ栄養について</li> <li>15. まとめ</li> </ol>
教 科 書	『リハビリテーションに役立つ栄養学の基礎』/栢下淳、若林秀隆 編集/ 医歯薬出版
参 考 文 献	『糖尿病食事療法のための食品交換表 第7版』/日本糖尿病学会編著/文光堂
成 績 評 価	前期試験 100 点満点、授業中の様子を考慮 受講にあたって、予習・復習を十分行うこと

科 目 名	生化学
担 当 教 員	高畑 佳史
単 位、必 修・選 択	2 単 位 選 択
履 修 対 象・形 態	1 年 次 前 期 講 義
授 業 科 目 概 要	ヒトの全体像を分野横断的に把握し、個体の調節機構や発生・成長・発達に関連する疾患を系統的に習得するためには、生化学の理解が不可欠である。本科目では生命体を構成する分子に着目し、化学反応の基礎的な運用を通して生命活動事象を理解できるように努める。生化学分野から国家試験問題に多数出題される内容も含まれるので、将来的な対策も含めて過去に出題された内容に関連分野についても学習し、教養として生命科学全般の知識の涵養を図る。
授 業 の 目 的	生命活動を行うために必須である代謝に関して、分子レベルでの理解が求められる。生命を構成する細胞の学習に始まり、一般生化学として、それぞれの代謝（糖代謝、タンパク質代謝、脂質代謝）の理解と、代謝に異常が生じた場合の疾患、症候について習得する。さらに後半では、運動器系としての役割を担う筋骨格系器官を構成する細胞とその働きを学習し、ホルモン、細胞内情報伝達機構と関連づけて筋骨格系の代謝機構について理解を深める。
授 業 計 画	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 生体の構成要素（1） - 細胞の役割と構造</li> <li>2. 生体の構成要素（2） - 生体の主要な構成要素とその働き</li> <li>3. 生体における化学反応（1） - 消化と吸収</li> <li>4. 生体における化学反応（2） - エネルギー代謝と化学反応</li> <li>5. 糖質の代謝 - 好気呼吸によるエネルギー産生</li> <li>6. 糖質の代謝 - 嫌気呼吸によるエネルギー産生</li> <li>7. 血糖調節機構と糖尿病</li> <li>8. 脂質、タンパク質の代謝</li> <li>9. 生体における恒常性</li> <li>10. ホルモン・増殖因子・サイトカイン</li> <li>11. 硬組織の形成と吸収のしくみ</li> <li>12. 細胞内情報伝達</li> <li>13. DNA 複製、転写、翻訳</li> <li>14. 遺伝子発現の調節</li> <li>15. 遺伝子とゲノムの解析（遺伝子工学）</li> </ol>
教 科 書	わかりやすい生化学/第5版/石黒伊三雄・篠原力雄 監修/ヌーヴェルヒロカワ/平成29年
参 考 文 献	なし
成 績 評 価	前期試験によって評価する。講義は私語を慎み、静粛に受けること。受講にあたって、予習・復習を十分行うこと。

科 目 名	公衆衛生学
担 当 教 員	河野 公一、臼田 寛、河野 令、横山 浩誉
単 位、必 修・選 択	2 単 位 必 修
履 修 対 象・形 態	2 年 次 後 期 講 義
授 業 科 目 概 要	社会と健康・疾病との関係や地域医療について理解し、個体および集団をとりまく環境諸要因や地域社会における個人と集団の特性を予防医学的視点から修得する。
授 業 の 目 的	健康、障害と疾病の概念を説明できる。 環境と健康・疾病との関係を概説できる。 産業保健を概説できる。 地域保健と医師の役割を説明できる。 感染症の予防、食品衛生について説明できる。 生活習慣に関連した疾病を列挙できる。 日本における社会保障・福祉制度を説明できる。 医療保険と公費医療や介護保険を説明できる。 疫学の概念と疫学の諸指標について説明できる。 などを目的とする。
授 業 計 画	1. 公衆衛生総論、環境保健
	2. 公衆衛生総論、環境保健
	3. 産業保健
	4. 産業保健
	5. 疫学・学校保健
	6. 疫学・学校保健
	7. 人口・保健統計、老人福祉
	8. 人口・保健統計、老人福祉
	9. 成人保健・地域保健
	10. 成人保健・地域保健
	11. 母子保健・口腔保健
	12. 母子保健・口腔保健
	13. 感染症・食品・栄養、国際保健・精神保健
	14. 感染症・食品・栄養、国際保健・精神保健
	15. 医療経済・障害者福祉
教 科 書	『医療・福祉系学生のための専門基礎科目』/河野 公一 編集代表/金芳堂
参 考 文 献	適時紹介する
成 績 評 価	後期試験による評価 受講にあたって、予習・復習を十分行うこと

科 目 名	生命倫理
担 当 教 員	行岡 秀和、丸野 元彦、仙波 恵美子
単位、必修・選択	1単位 必修
履修対象・形態	2年次 後期 講義
授 業 科 目 概 要	生命倫理学が登場した歴史的背景や生命倫理学で取り上げられている諸問題の基礎知識を学ぶ。
授 業 の 目 的	生命倫理の諸問題に知識として触れるだけでなく、「自分自身も当事者になりうる」という意識を持ち、「何が問題であり、どうあるべきか」という容易には答えの出ないことを自分なりに考え続ける力を養うことを目的とする。
授 業 計 画	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 生命倫理と医療、病名告知、インフォームドコンセント、自己決定権（行岡）</li> <li>2. 患者の心理、全人的ケア（行岡）</li> <li>3. 緩和ケア、ホスピスケア（行岡）</li> <li>4. 安楽死と尊厳死（丸野）</li> <li>5. 脳死と臓器移植（丸野）</li> <li>6. 臨床と医療倫理（丸野）</li> <li>7. 臨床研究における研究倫理とは何か（仙波）</li> <li>8. トラウマ（心的外傷）とその回復支援（仙波）</li> </ol>
教 科 書	特に指定せず、必要に応じて資料を配布する。 主にスライドや映像資料を用いて講義を行う。
参 考 文 献	各回講義内容に合わせ、適宜、関連資料の配布や参考図書を紹介を行う。
成 績 評 価	レポートと後期試験の成績によって評価する。 受講にあたって、予習・復習を十分行うこと。

科 目 名	運動器系解剖学
担 当 教 員	松尾 高行、山野 宏章
単位、必修・選択	4単位 必修
履修対象・形態	1年次 前期 講義
授 業 科 目 概 要	身体各部の構造と機能を理解することによって、身体運動を理解する基礎を身につける。そのため、①解剖学総論(細胞、組織、人体の区分)、②運動器を構成する骨(組織構造と肉眼的形態)、③関節(形態と働き)と靭帯、④筋(形態と作用、神経支配)、について学習する。
授 業 の 目 的	衰えた運動機能の回復がその主要目的である理学療法学にあつては、骨格や筋肉などの運動器官の解剖学的知識の修得は極めて重要である。授業においては、細胞と組織、骨格系、関節靭帯系、筋系の形態を機能と関連付けながら理解させる。さらに必要に応じて、それらの運動器官の発生や組織学的形態に関する知見を示して総合的な理解を深めさせ、この分野の科学に対する興味と関心を引き出すことを目的とする。
授 業 計 画	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 解剖学総論：人体の大要、細胞、組織、器官</li> <li>2. 骨学総論：骨の組織構造、機能、発生、</li> <li>3. 骨学各論：頭蓋骨、脊柱、胸郭</li> <li>4. 上肢の骨、下肢の骨</li> <li>5. 頭頸部・体幹の関節と靭帯</li> <li>6. 上肢の関節と靭帯</li> <li>7. 下肢の関節と靭帯</li> <li>8. 筋学総論：筋組織の種類、骨格筋の構造と作用</li> <li>9. 筋学各論：上肢帯・上腕の筋</li> <li>10. 前腕・手の筋</li> <li>11. 下肢帯・大腿の筋</li> <li>12. 下腿・足の筋</li> <li>13. 頭・頸部の筋</li> <li>14. 胸・腹部の筋</li> <li>15. 背部の筋</li> </ol>
教 科 書	『標準理学療法学・作業療法学-専門基礎分野 解剖学 第4版』/医学書院/2017年 消っして忘れない 解剖学 要点整理ノート 改定第2版/羊土社/2014年
参 考 文 献	『日本人体解剖学(上・下巻)第19版』/金子丑之助 他(著)/南山堂/1999年 『グレイ解剖学 原著第2版』塩田浩平ら[訳]/エルゼビア・ジャパン/2011年 『プロメテウス解剖学アトラス』解剖学総論・運動器系(第2版)/監訳 坂井建雄・松村譲児/医学書院/2011年 『人体の正常構造と機能』総編集/坂井建雄・河村克雅(編)/日本医事新報社/2008年 『新 徒手筋力検査法 原著第9版』協同医書出版社/2014年 『ボディ・ナビゲーション～触ってわかる身体解剖～(改訂版)』A. Biel 著, 監訳 阪本桂造/医道の日本社/2012年
成 績 評 価	前期試験、小テスト等の結果を総合して評価する。 講義に関して、十分な予習と復習をすること。



科 目 名	内臓系解剖学
担 当 教 員	稲垣 忍
単 位、必 修・選 択	2 単 位 必 修
履 修 対 象・形 態	1 年 次 後 期 講 義
授 業 科 目 概 要	本科目においては、「内臓系解剖学」について講義を行う。解剖学の基礎となる細胞組織について学び、消化器系、呼吸器系、泌尿器系、生殖器系、内分泌系について講義する。内臓の調節にもっとも重要な自律神経系についても復習をかねて講義を行う。
授 業 の 目 的	内臓系全般の成り立ちと形態的特徴について理解し、理学療法を学ぶ上での基礎知識を高めることを目的とする。そのために身体の重要な臓器について、循環器系、消化器系、泌尿器系、生殖器系、内分泌系の分類に従って、形態学的基礎知識を修得する。また、一個の受精卵から人体が発生するまでの形態学的過程を学ぶ。
授 業 計 画	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 細胞・組織概論 細胞の構成要素</li> <li>2. 細胞分裂と染色体</li> <li>3. 上皮組織</li> <li>4. 支持組織 結合組織、血液</li> <li>5. 支持組織 軟骨、骨組織</li> <li>6. 筋組織</li> <li>7. 人体の発生</li> <li>8. 消化器系 I</li> <li>9. 消化器系 II</li> <li>10. 呼吸器系 I</li> <li>11. 呼吸器系 II</li> <li>12. 泌尿器系 I</li> <li>13. 泌尿器系 II</li> <li>14. 生殖器系</li> <li>15. 生殖器系</li> </ol>
教 科 書	『標準理学療法学・作業療法学-専門基礎分野 解剖学 第4版』/医学書院/2015年 『解剖トレーニングノート』/竹内修二著/医学教育出版社/2016年
参 考 文 献	組織細胞生物学 南江堂 『標準理学療法学・作業療法学 専門基礎分野 生理学 第4版』/医学書院
成 績 評 価	試験の成績による 受講にあたって、予習・復習を十分行うこと

科 目 名	神経系解剖学(感覚器を含む)
担 当 教 員	稲垣 忍、仙波 恵美子
単位、必修・選択	2単位 必修
履修対象・形態	1年次 前期 講義
授 業 科 目 概 要	中枢神経系、末梢神経系および感覚器について、その構造と機能を概説する。理学療法士の仕事は「生きている人間の動作」を扱う。従って動きを指令する神経系や動きを感知する感覚系の構造と機能について熟知する必要がある。さらに、情動、学習、記憶、思考など高次脳機能についてその仕組みを理解することは、患者のQOLの向上を目指す理学療法学/リハビリテーションにおいて重要な意義がある。
授 業 の 目 的	神経系の理解のためには、単に構造の名称を覚えるのではなく、分子から組織まで系統的に理解する必要がある。そのため神経系の働きを、神経伝達物質や受容体など分子レベルでの理解を深めることを目標とする。理学療法士の仕事に直結する、運動系(錐体路・錐体外路系)、末梢神経系(脊髄神経・脳神経・自律神経)、感覚器(受容器・感覚神経)および感覚伝導系の構造についても体系的に理解する。
授 業 計 画	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 神経系の構成、髄膜と脳室系</li> <li>2. 神経系の発生</li> <li>3. 中枢神経系Ⅰ－脊髄</li> <li>4. 中枢神経系Ⅱ－延髄、橋、中脳、小脳</li> <li>5. 中枢神経系Ⅲ－間脳</li> <li>6. 中枢神経系Ⅳ－大脳</li> <li>7. 神経伝達のしくみ(神経伝達物質と受容体)</li> <li>8. 感覚器Ⅰ－体性感覚</li> <li>9. 感覚器Ⅱ－視覚・聴覚・平衡覚・味覚・嗅覚</li> <li>10. 脊髄神経Ⅰ－上肢</li> <li>11. 脊髄神経Ⅱ－体幹</li> <li>12. 脊髄神経Ⅲ－下肢</li> <li>13. 脳神経</li> <li>14. 自律神経系</li> <li>15. 上行性・下行性神経路のまとめ</li> </ol>
教 科 書	『標準理学療法学・作業療法学-専門基礎分野 解剖学 第4版』/医学書院/2015年 『解剖トレーニングノート』/竹内修二著/医学教育出版社/2016年
参 考 文 献	『プロメテウス解剖学アトラス』頭頸部/神経解剖(第2版)/監訳 坂井建雄・松村譲児/医学書院/2011年 『人体の正常構造と機能』総編集/坂井建雄・河村克雅(編)/日本医事新報社/2008年 『脳単』語源から覚える解剖学英単語集【脳神経編】監修 河合良訓、文 原島広至/(株)NTS/2005年
成 績 評 価	前期試験、レポートなどによって総合的に評価する。 受講にあたって、予習・復習を十分行うこと。

科 目 名	運動器系生理学
担 当 教 員	増原 光彦
単位、必修・選択	3単位 必修
履修対象・形態	1年次 後期 講義
授 業 科 目 概 要	生命体の運動の基礎となる神経・筋機能を中心とした生理機能を学習し、生体の運動の基本的生理機能を理解する。併せて身体運動行動のエネルギー獲得機構と消費機構を学習する。
授 業 の 目 的	一般に生理学は古くから植物性機能と動物性機能に大きく分類され、体系化されている。本講義においては、その中の動物性機能の主要生理機能である骨格筋と神経感覚器系を中心にその基礎的生理学理論を学習すると共に運動に要するエネルギー獲得機能のメカニズムを学習することを目的とする。
授 業 計 画	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 第1章：生理学とは(運動器系生理学の概要)</li> <li>2. 第12章：神経系の基礎 1(興奮のメカニズム)</li> <li>3. 第12章：神経系の基礎 2(興奮の伝導・伝達のメカニズム)</li> <li>4. 第14章：脳 1(中枢神経系機能・記憶と学習)</li> <li>5. 第14章：脳 2(睡眠と覚醒)</li> <li>6. 第13章：自律神経系 1 (体性神経系)・末梢神経(配布資料)</li> <li>7. 第15章：感覚 1(感覚概要・視覚)</li> <li>8. 第15章：感覚 2(聴覚・平衡感覚・体性感覚)</li> <li>9. 第16章：運動の調節 1 (運動支配中枢)・動物のからだと運動 (配布資料)</li> <li>10. 第16章：運動の調節 2(大脳皮質等運動野)</li> <li>11. 第11章：筋収縮 1(収縮力の発揮機構)</li> <li>12. 第11章：筋収縮 2(収縮のエネルギー獲得機構)</li> <li>13. 第7章：代謝 1 (エネルギー代謝概要)</li> <li>14. 第7章：代謝 2 (運動行動のエネルギー・効率)</li> <li>15. 補足とまとめ</li> </ol>
教 科 書	『やさしい生理学 改訂7版』/彼末一之、能勢 博編集 株式会社 南江堂
参 考 文 献	『標準理学療法学・作業療法学 専門基礎分野 生理学第3版』/石澤光郎・富永淳執筆 医学書院
成 績 評 価	後期試験による評価 受講にあたって、予習・復習を十分行うこと。

科 目 名	内臓系生理学
担 当 教 員	稲垣 忍
単位、必修・選択	3単位 必修
履修対象・形態	2年次 前期 講義
授 業 科 目 概 要	動物の植物性機能と動物性機能の内、植物機能である生命維持システムは様々な内臓により維持されている。本講義においては生命維持システムについて学習する。
授 業 の 目 的	本講義においては、主要内臓生理機能である血液、循環系・呼吸系・泌尿系、消化・吸収系、生殖系、内分泌系などを中心にその基礎生理学を学習すると共に生命維持の基本的なメカニズムを理解する。
授 業 計 画	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 生理学序論</li> <li>2. 細胞と内部環境 細胞の構造</li> <li>3. 細胞と内部環境 静止電位と活動電位</li> <li>4. 血液・免疫</li> <li>5. 血液・免疫</li> <li>6. 心臓と循環</li> <li>7. 心臓と循環</li> <li>8. 心臓と循環</li> <li>9. 呼吸とガスの運搬</li> <li>10. 呼吸とガスの運搬</li> <li>11. 尿の生成</li> <li>12. 消化と吸収</li> <li>13. 内分泌</li> <li>14. 生殖と発生</li> <li>15. 補足とまとめ</li> </ol>
教 科 書	『標準理学療法学・作業療法学 専門基礎分野 生理学 第4版』/医学書院
参 考 文 献	『標準理学療法学・作業療法学-専門基礎分野 解剖学 第4版』/医学書院/2015年 やさしい生理学 南江堂
成 績 評 価	試験による評価 受講にあたって、予習・復習を十分行うこと。

科 目 名	解剖学実習
担 当 教 員	稲垣 忍、助川 明、山野 宏章
単位、必修・選択	1単位 必修
履修対象・形態	1年次 後期 実験・実習
授 業 科 目 概 要	筋系や内臓系に関する人体模型と学生相互の人体を体表から観察することにより、人体の肉眼的構造の理解を深める。また、骨、筋、消化器、呼吸器、泌尿器などの組織標本の観察とスケッチを行うことにより、構成する細胞を認識し、人体の構造を機能と関連付けて理解する。
授 業 の 目 的	運動器系解剖学、内臓器系解剖学、神経解剖学においては、講義を聴講することによって人体の構造を機能との関連で理解することを目的としている。これに対して、本解剖学実習においては、組織標本、骨標本、人体模型、人体を用いて、具体的実態として人体の構造を理解する。また、人体の機能を組織構造との関連で理解する。
授 業 計 画	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 骨格標本・人体模型の観察と体表解剖実習-上肢 1-</li> <li>2. 骨格標本・人体模型の観察と体表解剖実習-下肢 1-</li> <li>3. 骨格標本・人体模型の観察と体表解剖実習-体幹・股関節 1-</li> <li>4. 骨格標本・人体模型の観察と体表解剖実習-上肢 2-</li> <li>5. 骨格標本・人体模型の観察と体表解剖実習-下肢 2-</li> <li>6. 骨格標本・人体模型の観察と体表解剖実習-体幹・股関節 2-</li> <li>7. 細胞組織学実習 1A 軟骨・骨、 骨学実習 1B 上肢</li> <li>8. 細胞組織学実習 1B 軟骨・骨、 骨学実習 1A 上肢</li> <li>9. 細胞組織学実習 2A 腺、 骨学実習 2B 下肢</li> <li>10. 細胞組織学実習 2B 腺、 骨学実習 2A 下肢</li> <li>11. 細胞組織学実習 3A 上皮、 骨学実習 3B 頭蓋骨・脊椎骨・肋骨</li> <li>12. 細胞組織学実習 3B 上皮、 骨学実習 3A 頭蓋骨・脊椎骨・肋骨</li> <li>13. 細胞組織学実習 4A 肝臓・腎臓、 骨学実習 4B 試験</li> <li>14. 細胞組織学実習 4B 肝臓・腎臓、 骨学実習 4A 試験</li> <li>15. 系統解剖学実習</li> </ol>
教 科 書	『標準理学療法学・作業療法学-専門基礎分野 解剖学 第4版』/医学書院/2015年 『図解 四肢と脊椎の診かた』/医歯薬出版株式会社/1984年
参 考 文 献	『プロメテウス解剖学アトラス』解剖学総論・運動器系(第2版)医学書院/2011年 『解剖学アトラス 第3版』/越智淳三(訳)/文光堂/1990年 組織細胞生物学 南江堂 ポケット組織学 リサ・リー著、西村書店 2018.3
成 績 評 価	複数のレポート、実習中の課題、記述式試験などによって総合的に評価する。実習に関して、十分な予習と復習をすること。

科 目 名	生理学実習
担 当 教 員	幸田 利敬、神里 巖
単 位、必 修・選 択	1 単 位 必 修
履 修 対 象・形 態	2 年 次 後 期 実 験・実 習
授 業 科 目 概 要	本実習の目的は、運動器系及び内臓系生理学の講義で学習してきたことを実験実習を通して直に確認することである。運動器系では筋・神経系の反射運動や筋力、随意運動等を学生間で実習し確認する。循環器系では心電図を通して心機能を確認する。呼吸器系では肺機能を測定し、運動に伴う生理的变化等を理解する。また、それらの測定で用いる実験機器の取り扱い方、データの処理やまとめ方を学習する。
授 業 の 目 的	生体の生理機能を実験的モデルを通して理解するとともに、その生理機能の動態を評価する方法を身につけることを目的とする。また、実験データの取り扱い方や生命倫理について考える機会を与え、科学的ものの見方、考え方の能力を高める。6グループに分かれ、各実習を2週にわたり行う。
授 業 計 画	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. オリエンテーション(前半)</li> <li>2. 呼吸機能検査</li> <li>3. 呼吸機能検査</li> <li>4. 強さ時間曲線測定</li> <li>5. 強さ時間曲線測定</li> <li>6. 心電図</li> <li>7. 心電図</li> <li>8. まとめと発表、オリエンテーション(後半)</li> <li>9. 筋電図</li> <li>10. 筋電図</li> <li>11. 呼気ガス分析装置を用いた代謝活動の分析</li> <li>12. 呼気ガス分析装置を用いた代謝活動の分析</li> <li>13. 等速性運動機器を用いた筋活動の観察</li> <li>14. 等速性運動機器を用いた筋活動の観察</li> <li>15. まとめと発表</li> </ol>
教 科 書	各実習項目のマニュアルを作成して配布する。
参 考 文 献	『新訂 生理学実習書』/日本生理学会教育委員会/南江堂
成 績 評 価	各実習項目のレポートと実習実施内容により総合評価する。再試験は行わない。受講にあたって、予習・復習を十分行うこと。

科 目 名	人間発達学
担 当 教 員	高井 範子
単位、必修・選択	1単位 必修
履修対象・形態	2年次 前期 講義
授 業 科 目 概 要	人間は生を受けてから死に至るまでの時間の経過に伴い心身共に変化していく存在である。本科目においては、理学療法に関連のある領域を含め、発達の諸理論をはじめとして、認知・情動・知的・心理的・身体的・社会的側面における人間の発達を生涯発達の観点から幅広く学修する。また、授業の一部において発達に関連するテーマを取り上げ、グループワークをも実施する。
授 業 の 目 的	本科目においては、生涯発達の観点から人間の変化を捉えていくが、理学療法領域に必要な知識を身につけると共に、自分自身の成長・発達を振り返り、授業で学んだ内容を患者理解や今後の人生に活用して行くことを目的とする。本科目での学びをとおして、患者様の人生の一端に関わる責任ある医療人として、自分自身がこれからの人生をどのような姿勢で生きていくのか、人生観、価値観的な側面からも各自の日々生きる姿勢を問い直す機会として頂きたい。
授 業 計 画	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 人間の生涯発達とは、発達の諸理論Ⅰ（エリクソン、ブルーナー、その他）</li> <li>2. 発達の諸理論Ⅱ：ピアジェの理論，認知機能の発達</li> <li>3. 運動能力（乳児期の反射・反応を含む），言語・情動，知的機能の発達</li> <li>4. 自己意識および心身の発達Ⅰ：幼児期・児童期</li> <li>5. 自己意識および心身の発達Ⅱ：思春期・青年期</li> <li>6. 成人期・高齢期のころと身体</li> <li>7. 発達障がいについての理解</li> <li>8. まとめ</li> </ol>
教 科 書	毎回の授業においてプリント配布
参 考 文 献	『リハビリテーションのための人間発達学』大城昌平（編），メディカルプレス，2010. 『おうふう心理ライブラリー 発達心理学』，榎本博明（編），おうふう，2010.
成 績 評 価	前期試験（80%），授業時のコメントとレポート（20%）により総合的に評価する。受講にあたって、予習・復習を十分行うこと。

科 目 名	運動学
担 当 教 員	粕淵 賢志
単位、必修・選択	3単位 必修
履修対象・形態	1年次 後期 講義
授業科目概要	運動学は、身体の構造と機能を学習することにより、身体のメカニズムと運動の様相を理解する。身体運動の理解に必要な生体力学や、全身の主な関節の運動、筋の機能について理解する。さらに、姿勢や歩行について学習し、人間の動作について運動学的観点から理解する。
授業の目的	運動力学の基礎を理解し、運動学の基本知識を習得する。また、理学療法に必要な関節や筋の機能について運動学的観点から理解する。姿勢や歩行の基礎を学習し、動作分析の基本となる知識を習得する。
授業計画	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 関節・筋の構造と機能</li> <li>2. 生体力学の基礎①</li> <li>3. 生体力学の基礎②</li> <li>4. 生体力学の基礎③</li> <li>5. 肩関節の運動学</li> <li>6. 肘関節の運動学</li> <li>7. 手関節の運動学</li> <li>8. 股関節の運動学</li> <li>9. 膝関節の運動学</li> <li>10. 足関節の運動学</li> <li>11. 体幹の運動学</li> <li>12. 姿勢</li> <li>13. 歩行①</li> <li>14. 歩行②</li> <li>15. 運動の学習・運動とエネルギー供給機構</li> </ol>
教科書	『15 レクチャーシリーズ 理学療法・作業療法テキスト 運動学』/小島 悟編集/中山書店
参考文献	『基礎運動学』/中村隆一 他著/医歯薬出版 『カパンジー機能解剖学』/塩田悦仁 監訳/医歯薬出版 『筋骨格系のキネシオロジー』/島田智明 監修/医歯薬出版
成績評価	講義中の小テスト、後期試験を総合して評価する。 講義に関して、十分な予習と復習をすること。



科 目 名	病理学
担 当 教 員	小仲 邦
単位、必修・選択	2単位 必修
履修対象・形態	2年次 後期 講義
授 業 科 目 概 要	病理学は疾病の成り立ちを明らかにする学問であり、疾患を理解するために不可欠である。さらに、臨床の場においても病気の診断上重要な役割をはたしている。すべての医療従事者は基本的な病理学の知識を身につけることが求められる。
授 業 の 目 的	病気の本質を系統的に提示し、病気の成り立ちと症状をもたらす機序を解説する。知ること、理解することの楽しさとともに病理を把握し、臨床医学を学ぶうえで役立つようにすることが目標である。
授 業 計 画	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 総論Ⅰ 病因、病理検査法・診断法</li> <li>2. 総論Ⅱ 退行性病変、変性病変、代謝異常</li> <li>3. 総論Ⅲ 循環障害、進行性病変</li> <li>4. 総論Ⅳ 炎症、免疫、感染症</li> <li>5. 総論Ⅴ 腫瘍</li> <li>6. 総論Ⅵ 先天異常、老化</li> <li>7. 各論Ⅰ 循環器</li> <li>8. 各論Ⅱ 呼吸器</li> <li>9. 各論Ⅲ 消化器Ⅰ</li> <li>10. 各論Ⅳ 消化器Ⅱ</li> <li>11. 各論Ⅴ 内分泌</li> <li>12. 各論Ⅵ 泌尿器</li> <li>13. 各論Ⅶ 生殖器</li> <li>14. 各論Ⅷ 神経系、感覚器</li> <li>15. 各論Ⅸ 運動器、皮膚</li> </ol>
教 科 書	『わかりやすい病理学 改訂第6版』/岩田隆子 監修/南江堂/2016年
参 考 文 献	病理学コア画像（一般社団法人日本病理学会） <a href="http://pathology.or.jp/corepictures2010/index.html">http://pathology.or.jp/corepictures2010/index.html</a>
成 績 評 価	受講態度、授業内小テスト、後期試験の成績を総合的に評価する。受講にあたって、予習・復習を十分行うこと。

科 目 名	臨床心理学
担 当 教 員	高井 範子
単 位、必 修・選 択	2 単 位 必 修
履 修 対 象・形 態	2 年 次 前 期 講 義
授 業 科 目 概 要	理学療法士としての仕事の質を高めるには専門の知識や技術だけでなく、さまざまな状況にある患者の精神的な辛さに対する心のケアも必要となる。対人援助職に就く者は患者の辛さに共感、傾聴し、ありのままを受容する姿勢は不可欠である。そのために必要な臨床心理学の基礎的知識を本科目において学び、ロールプレイングを通して実践力を培う。患者・障がい者の心理的側面をも含め、医療現場で活用可能な臨床心理学の基礎理論、心理アセスメント、心理療法を講義し、医療面接ロールプレイングなどを実施する。
授 業 の 目 的	患者により良いリハビリテーションを行うためには、先ず患者との間に信頼関係が構築できなければならない。また、患者のさまざまな心理的反応をどう捉えるのかにおいて、さらに医療スタッフ間や種々の人間関係においても臨床心理学の知見は不可欠である。本科目において、臨床心理学の基礎的理論や代表的な心理療法を学ぶことによって他者理解、患者理解、自己理解につなげることを目的とする。また、医療面接ロールプレイングをとおして医療現場で役立つカウンセリングの基本的技法を身につけることをも目的とする。
授 業 計 画	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 臨床心理学とは</li> <li>2. 臨床心理検査法：心理アセスメントとその技法</li> <li>3. 青年期の臨床事例：適応・不適応・葛藤</li> <li>4. フロイトの精神分析学（防衛機制・転移を含む）</li> <li>5. ユングの分析心理学</li> <li>6. ロジャーズの自己理論と来談者中心療法</li> <li>7. フランクルの実存分析理論</li> <li>8. 生と死を考える</li> <li>9. 認知行動療法・論理療法</li> <li>10. 集団療法・ゲシュタルト療法・内観療法・遊戯療法など</li> <li>11. 心の諸症状についての理解（患者・障がい者心理に対する理解）</li> <li>12. 言語的・非言語的コミュニケーションとその面接態度</li> <li>13. 医療現場で役立つカウンセリングの基本姿勢と技法・態度：医療面接ロールプレイング（傾聴・共感・受容）</li> <li>14. 医療現場で活用可能なカウンセリングの面接技法の実際</li> <li>15. まとめ</li> </ol>
教 科 書	毎回の授業においてプリント配布
参 考 文 献	『やさしく学べる心理療法の基礎』, 窪内節子・吉武光代 (共著), 培風館, 2003.
成 績 評 価	前期試験 (60%), 授業中の4課題 (20%), レポート (10%), 授業時のコメント・ロールプレイ参加度 (10%) により総合的に評価する。毎回の予習・復習をしっかりとしておくこと。

科 目 名	内科学
担 当 教 員	小仲 邦
単位、必修・選択	2単位 必修
履修対象・形態	2年次 後期 講義
授 業 科 目 概 要	医療の高度化により多職種との連携によるチーム医療が一般化している。チーム医療においては共通の理解に立って患者の診療が進められる。その理解において最も必要とされるのが、すべての臨床医学の基礎となる内科学の知識である。
授 業 の 目 的	疾患の成り立ちからはじめて、内科疾患の症候、診断、治療ならびに経過・予後を学習する。さらに、理学療法が臨床医学全体の中でどのような位置付けにあるか理解し、内科疾患と理学療法の係わりを学ぶ。
授 業 計 画	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 臨床医学・内科学概論</li> <li>2. 症状・徴候の意義</li> <li>3. 環境要因に基づく疾患、中毒</li> <li>4. 感染症</li> <li>5. 免疫・アレルギー疾患、膠原病</li> <li>6. 循環器疾患Ⅰ</li> <li>7. 循環器疾患Ⅱ</li> <li>8. 呼吸器疾患</li> <li>9. 消化器疾患Ⅰ</li> <li>10. 消化器疾患Ⅱ</li> <li>11. 内分泌疾患</li> <li>12. 代謝疾患</li> <li>13. 腎・泌尿器疾患</li> <li>14. 血液・造血器疾患</li> <li>15. 神経・筋疾患</li> </ol>
教 科 書	『メディカルスタッフのための内科学第4版』/伊藤進他編著/医学出版社/2013年
参 考 文 献	なし
成 績 評 価	授業態度、授業内小テスト、後期試験の成績を総合して評価する。受講にあたって、予習・復習を十分行うこと。

科 目 名	整形外科科学
担 当 教 員	森友 寿夫
単位、必修・選択	2単位 必修
履修対象・形態	2年次 後期 講義
授業科目概要	高齢化社会とスポーツが盛んになることによって、整形外科疾患を有する患者が増加し、個人や家族、職場、社会に与える影響が増大している。運動機能障害から日常生活活動を障害する原因となる、骨代謝・系統疾患、骨と関節の感染症、炎症性関節疾患、退行性・変性性関節疾患、骨端症・骨壊死、脊椎・脊髄疾患、骨・軟部腫瘍、末梢神経障害、神経・筋疾患、先天性疾患などの病因、病態生理、診断、治療法、予後について学習し、理解を深める。
授業の目的	先ず運動器の基礎の理解を深める。その中で骨・軟骨、筋肉、関節はそれぞれ独立したものでなく協調し、互いに影響し合いながら働くことを学ぶ。次に各分野毎にどのような疾患があるのか、その病因、病態、生理についての知識を得た上でどのように診断するのか、治療法としてどのような方法があるのかについて理解し、臨床的に活かしていくことを目的とする。
授業計画	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 整形外科総論 — 整形外科診断学</li> <li>2. 整形外科総論 — 整形外科治療学</li> <li>3. 整形外科各論 — 肩甲帯および肘の疾患</li> <li>4. 整形外科各論 — 前腕、手関節の疾患</li> <li>5. 整形外科各論 — 手の疾患</li> <li>6. 整形外科各論 — 末梢神経損傷</li> <li>7. 整形外科各論 — 頸椎の疾患</li> <li>8. 整形外科各論 — 胸腰椎の疾患</li> <li>9. 整形外科各論 — 骨盤および股関節の疾患</li> <li>10. 整形外科各論 — 膝関節・スポーツ傷害</li> <li>11. 整形外科各論 — 足の疾患</li> <li>12. 整形外科各論 — 関節リウマチとその類縁疾患</li> <li>13. 整形外科各論 — 骨端症・骨壊死</li> <li>14. 整形外科各論 — 先天性疾患</li> <li>15. 整形外科各論 — 骨・軟部腫瘍</li> </ol>
教科書	『TEXT 整形外科科学 改訂4版』（編者、出版社）/糸満盛憲（ほか）編集/南山堂
参考文献	『整形外科 New MOOK 14、リウマチ類縁疾患』/越智隆弘、菊池臣一 編集/2004年 『図解 整形外科』改訂2版/久保俊一、山下敏彦ら編集/2012年/金芳堂 『図解で理解：基礎からレクチャー！整形外科疾患と看護』 /GARYA. SHANKMAN 原著・鈴木勝 監訳 『整形外科的理学療法、基礎と実践』；『骨・関節 X線写真の撮りかたと見かた』 第7版/堀尾重治/2007年/医学書院
成績評価	後期試験で評価する。 受講にあたって、予習・復習を十分行うこと。

科 目 名	神経内科学
担 当 教 員	今岡 弘之
単位、必修・選択	1単位 必修
履修対象・形態	3年次 前期 講義
授 業 科 目 概 要	総論と各論をリンクさせながら幅広い知識を講義します。
授 業 の 目 的	実用的な知識の修得を目的とします。
授 業 計 画	1. 神経内科学の基礎
	2. 診察法
	3. 局所診断
	4. 高次脳機能（失語 他）
	5. 意識障害
	6. 運動マヒ、感覚障害
	7. 認知症、脳血管障害
	8. 末梢神経障害、筋疾患、変性疾患
教 科 書	『標準理学療法学・作業療法学 神経内科学 第4版』/医学書院 『病気がみえる VOL7 脳・神経 第2版』/メディックメディア
参 考 文 献	『病気がみえる VOL11 運動器・整形外科 第1版』/メディックメディア
成 績 評 価	前期試験（穴埋めによる記述試験）により評価する。 受講にあたって、予習・復習を十分行うこと。

科 目 名	精神医学
担 当 教 員	鐘本 英輝
単 位、必 修・選 択	2 単 位 必 修
履 修 対 象・形 態	3 年 次 前 期 講 義
授 業 科 目 概 要	精神疾患（統合失調症、うつ病、器質性精神病、中毒性精神病、心因性精神病、神経症、精神発達障害、老年期の精神障害等）の臨床例を取り上げ、病因、臨床症状、検査、診断、治療、精神保健等基礎的な知識や、リエゾン等のリハビリテーション分野でも応用できる精神医学的アプローチについて講義する。
授 業 の 目 的	精神疾患の基礎と臨床的知識を学び、実臨床における精神疾患を罹患した患者への適切な対応を身につける。
授 業 計 画	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 精神医学総論 1</li> <li>2. 精神医学総論 2</li> <li>3. 器質性精神障害</li> <li>4. 症状性精神障害・物質関連精神障害</li> <li>5. 統合失調症</li> <li>6. 気分障害</li> <li>7. 神経症性障害</li> <li>8. パーソナリティ障害</li> <li>9. 摂食・睡眠などの生理的障害</li> <li>10. 精神遅滞・発達障害</li> <li>11. リエゾン精神医学</li> <li>12. リハビリテーション</li> <li>13. 司法・福祉など</li> <li>14. ライフサイクルと精神医学</li> <li>15. まとめ</li> </ol>
教 科 書	『標準理学療法学・作業療法学 専門基礎分野 精神医学 第4版』/上野武治 /医学書院/2015年
参 考 文 献	『看護のための精神医学 第2版』/中井久夫、山口直彦/医学書院/2004年』
成 績 評 価	前期試験（筆記試験）で評価 受講にあたって、予習・復習を十分行うこと。

科 目 名	小児科学
担 当 教 員	仁科 昌久
単位、必修・選択	2単位 必修
履修対象・形態	3年次 前期 講義
授業科目概要	小児疾患の基礎と臨床的知識を学ぶことを目標とする。小児疾患（先天異常と染色体異常、先天性代謝異常、新生児の生理と適応、低出生体重児、代謝異常と内分泌疾患、免疫・アレルギー性疾患、感染症及び呼吸器疾患、血液・腫瘍性疾患、消化器疾患、腎・泌尿器疾患、神経疾患、筋疾患等）の臨床例を取り上げ、病因、臨床症状、検査、診断、治療、予後等を教授する。小児の生活環境に及ぼす影響を含め、小児を全人的な観点からとらえていく。
授業の目的	医療のプロとして、世界に通用する必要な知識を習得することを目的とする。 小児科領域に関しては、何が重要なことかを認知していく事が求められる。  ※ 授業計画は状況に応じて予定を変える事もあります。
授業計画	1. 小児科イントロダクション、小児科概論 (1) 2. 小児科概論 (2) 3. 小児生理学 (1) 4. 小児生理学 (2) 5. 小児生理学 (3) 6. 小児科感染症 (1) 7. 小児科感染症 (2) 8. 小児科先天性疾患・代謝疾患 (1) 9. 小児科先天性疾患・代謝疾患 (2) 10. 小児科 血液・腫瘍疾患 (1) 11. 小児科 血液・腫瘍疾患 (2) 12. 小児科 免疫・アレルギー疾患 13. 小児科 消化器疾患 14. 小児科 泌尿器疾患 15. 小児科 神経・筋疾患
教科書	『標準理学療法学・作業療法学 専門基礎分野 小児科学 第4版』
参考文献	特になし。
成績評価	授業中の状態と前期試験の総合評価をします。 受講にあたって、予習・復習を十分行うこと。

科 目 名	脳神経外科学
担 当 教 員	丸野 元彦
単位、必修・選択	2単位 選択
履修対象・形態	3年次 前期 講義
授 業 科 目 概 要	脳神経外科領域で取り扱う疾患を理解するために必要な神経系の解剖と生理について学び、画像検査を初めとした諸検査、疾患の診断に不可欠な神経学的徴候などの知識を習得する。次に脳血管障害、脳腫瘍、頭部外傷、てんかん、脊髄・脊椎疾患など種々の疾患について基礎的および臨床的な重要事項を講義する。さらに最近のトピックスまで触れ、疾患に対する理解を深める。
授 業 の 目 的	脳神経外科疾患の基礎および臨床的知識を学ぶことを目標とする。理学療法を実践する上で必要とされる脳神経外科領域の疾患の基本的な概念を学ぶ。症候、検査法、治療法および予後など疾患についての臨床知識を学ぶ。さらに、チーム医療の一員として他職種とのスムーズな連携を取れるよう学習を深める。
授 業 計 画	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 総論：脳の構造と機能</li> <li>2. 総論：中枢神経の機能と局在</li> <li>3. 総論：脳神経検査（画像検査他）</li> <li>4. 総論：症候（1） 脳に特異な症候と病態</li> <li>5. 総論：症候（2） 認知症</li> <li>6. 脳血管障害（1） 脳出血性疾患</li> <li>7. 脳血管障害（2） 虚血性疾患</li> <li>8. 脳腫瘍（1） 神経膠腫 他</li> <li>9. 脳腫瘍（2） 髄膜腫 他</li> <li>10. 脊髄・脊椎疾患</li> <li>11. 頭部外傷</li> <li>12. 先天奇形・水頭症・感染性疾患</li> <li>13. 機能的外科・てんかん</li> <li>14. がん・神経疾患のリハビリテーション（1）</li> <li>15. がん・神経疾患のリハビリテーション（2）</li> </ol>
教 科 書	『病気がみえる vol.7 脳・神経』/メディックメディア/2011年
参 考 文 献	『脳神経疾患ビジュアルブック 初版』/学研/2010年
成 績 評 価	前期試験（筆記試験）成績と授業態度と組み合わせて評価する。受講にあたって、予習・復習を十分行うこと。



科 目 名	救急医学
担 当 教 員	行岡 秀和
単位、必修・選択	1単位 必修
履修対象・形態	2年次 前期 演習
授 業 科 目 概 要	救急医療に関する総合的な知識を得る目的で、各種救急患者の病態・症状・診断・治療、緊急度・重症度の判断、救急医療体制・プレホスピタルケア、心肺蘇生法・救急処置などについて学習する。具体的な事例や救急蘇生用器具・マネキンを用いて、実地で役立つような知識を習得する。
授 業 の 目 的	救急患者は各種の傷病により、迅速な診断・治療を必要としている。このような患者の病態・症状・必要な処置を理解し、重症度・緊急度の判断ができることが重要であり、救急医療に参加できる基本的知識を得る。また、現在の救急医療体制、プレホスピタルケアについて理解する。さらに、突然の心肺停止患者に対して救急蘇生の基本となる人工呼吸法、心臓マッサージなどの実施法を学習する。
授 業 計 画	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 生と死、死の判定、臓器移植、生命倫理</li> <li>2. 心肺停止(原因・病態・予後)</li> <li>3. 心肺蘇生法の理論と実際</li> <li>4. 救急医療体制</li> <li>5. プレホスピタルケア</li> <li>6. 災害医療</li> <li>7. 緊急度・重症度の判断と対応</li> <li>8. 救急処置</li> <li>9. 感染対策</li> <li>10. 呼吸・循環障害</li> <li>11. 意識障害・神経疾患</li> <li>12. 消化器・代謝障害</li> <li>13. 小児・妊婦の救急疾患</li> <li>14. 外傷・熱傷</li> <li>15. 異物・中毒・熱中症・低体温</li> </ol>
教 科 書	『ICUのための呼吸理学療法』/丸川征四郎 編集/メディカ出版/2010年
参 考 文 献	『救急医療カラーアトラス』/龍村俊樹 編集/医薬ジャーナル社/2001年 『ナースのための救急・集中治療』/坂田育弘 編集/メディカ出版/2006年 『外傷、熱傷患者の鎮痛・鎮静法』/行岡秀和/ICUとCCU 23(10)735-741/1999年 『病院外心停止後救命例の予後と問題点』/小玉忠知 他/蘇生 24(1)1-4/2005年 『病院前救護医療の現況』/石見拓 他/日本内科学会雑誌 95(12)18-23/2006年
成 績 評 価	前期試験 80%、講義内課題レポート 20%を合わせて評定する。 受講にあたって、予習・復習を十分行うこと。

科 目 名	薬理学
担 当 教 員	井上 都
単位、必修・選択	1単位 選択
履修対象・形態	3年次 前期 講義
授 業 科 目 概 要	医療現場において薬物治療を行っている患者さんにかかわる際、薬物療法がリハビリに何等か影響を与えているか判断する知識を求められる機会は少なくはない。薬物の生体に対する作用に関する基本的知識を修得することを目的とする。
授 業 の 目 的	薬と生体との相互作用の結果起こる現象とその機構など、薬物療法の基礎となる薬理学を講義する。①一般的な薬物の知識を身につける、②よく使われる薬物の作用とその作用点および作用機序について理解できる、③一般的な薬物の体内動態について理解できる、④薬効に影響する因子について理解できる、⑤神経・筋疾患、精神疾患などの治療薬の作用機序および主作用と副作用について理解できる。
授 業 計 画	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 薬について（分類、体内動態、主作用と副作用、相互作用）</li> <li>2. 神経系に作用する薬</li> <li>3. 呼吸器系、消化器系に作用する薬</li> <li>4. 循環器系・血液に作用する薬</li> <li>5. 炎症・免疫系に作用する薬、抗菌薬</li> <li>6. 内分泌系に作用する薬</li> <li>7. その他（泌尿器系、眼科領域など）に作用する薬、抗悪性腫瘍薬</li> <li>8. リハビリに関係する薬</li> </ol>
教 科 書	『いちばんやさしい薬理学』/木澤靖夫 監修/成美堂出版/2017年 『わかりやすい薬理学』/安原一・小口勝司 編集/ヌーヴェルヒロカワ
参 考 文 献	なし
成 績 評 価	前期試験 100 点満点、授業中の様子を考慮 受講にあたって、予習・復習を十分行うこと。

科 目 名	臨床検査学
担 当 教 員	小仲 邦
単位、必修・選択	1単位 選択
履修対象・形態	3年次 前期 講義
授 業 科 目 概 要	臨床検査は疾患の診断、治療方針決定、経過観察に不可欠である。臨床検査を利用するには、検査の目的、検査法の特長、検査値の意味を理解していることが前提となる。
授 業 の 目 的	理学療法は広い意味での臨床検査に基づいて実施される。理学療法の対象疾患が拡大しており、理学療法士自身が検査を基に病態を理解し、その場リスクを判断する能力も求められる。講義では、各種臨床検査、検査値の意義を習得し、医療スタッフとしての知識と実践力を身につけることを目的とする。
授 業 計 画	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 総論 1 (循環器・呼吸器)</li> <li>2. 総論 2 (消化器・肝胆膵)</li> <li>3. 総論 3 (感染症・血液・内分泌)</li> <li>4. 総論 4 (腎・電解質)</li> <li>5. 総論 5 (神経・免疫)</li> <li>6. 総論 6 (代謝・染色体・遺伝子、他)</li> <li>7. 形態検査・画像検査</li> <li>8. 演習</li> </ol>
教 科 書	『臨床医学総論/臨床検査医学総論』/奈良信雄、高木康、和田隆志 編/医歯薬出版株式会社/2016年
参 考 文 献	『医学領域における臨床検査学入門』第4版/藤田保健衛生大学「臨床検査学入門」編集委員会 編著 KTC 中央出版 2018年
成 績 評 価	受講成績、演習成績、前期試験により総合評価する。 受講にあたって、予習・復習を十分行うこと。

科 目 名	スポーツ傷害学
担 当 教 員	史野 根生
単 位、必 修・選 択	1 単 位 選 択
履 修 対 象・形 態	3 年 次 前 期 講 義
授 業 科 目 概 要	わが国におけるスポーツ人口の増加は目覚ましい。スポーツを行う人の体力や健康状態も様々で、不適切なスポーツ活動による結果、スポーツ傷害も増加している。スポーツ傷害への対策としては、第一に予防が重要であるが、不幸にして起こった傷害に対しては、早期発見・治療を行うことが大切である。本授業では、スポーツ傷害の成因、病態、診断、そしてスポーツ理学療法を含む治療体系に関する理論や技術を学習する。
授 業 の 目 的	スポーツ傷害の基礎（解剖、生体力学）、成因、病態、診断、そしてスポーツ理学療法を含む治療体系に関する理論や技術を学習する。スポーツ傷害学を身につけた理学療法士の育成を目指す。
授 業 計 画	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. スポーツ傷害学総論</li> <li>2. スポーツ傷害理解に必要な解剖学、生体力学</li> <li>3. 各論：上肢1</li> <li>4. 各論：上肢2</li> <li>5. 各論：脊椎</li> <li>6. 各論：下肢1</li> <li>7. 各論：下肢2</li> <li>8. スポーツ傷害 リハビリテーション</li> </ol>
教 科 書	『スポーツ膝の臨床 第2版』/金原出版/2014
参 考 文 献	なし
成 績 評 価	前期試験による。

科 目 名	ペイン・リハビリテーション
担 当 教 員	仙波 恵美子
単 位、必 修・選 択	2 単 位 選 択
履 修 対 象・形 態	3 年 次 後 期 講 義
授 業 科 目 概 要	痛みの発生メカニズム、痛覚伝達経路、中枢での痛みの回路、下行性疼痛調節系、急性痛と慢性痛、痛みが惹起する心理的・情動的变化などを学ぶことを目標とする。痛みは身体に警告を与える重要な感覚の一つであるが、痛みを抱える患者、特に慢性痛で悩む患者では生活動作や運動において大きく制限があり、睡眠が障害されて気分的にもうつになりやすく、生活の質（QOL）を低下させる大きな要因となる。痛みを訴える患者に対し、運動機能や日常生活活動の回復を促すための治療、さらに運動療法が鎮痛や抗うつに働くメカニズムについても教授する。
授 業 の 目 的	痛みの基礎的なメカニズムについて、解剖学・生理学・病理学・薬理学などの知識をもとに学習を深め、痛みが慢性化するメカニズム、すなわち、痛みに対する恐怖や不安が行動を回避させ痛みを慢性化させること（「恐怖回避モデル」）について理解する。さらに、日常生活での活動量を増やし、物事をポジティブに捉える姿勢（患者主動型医療）がペイン・リハビリテーションの基本であることを理解する。
授 業 計 画	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 痛みとは何か？疼痛研究の歴史</li> <li>2. 末梢で痛みを受容するメカニズム</li> <li>3. 生理的な痛みと病的な痛み（炎症性疼痛・神経障害性疼痛）</li> <li>4. 脊髄後角における痛みの伝達と修飾、痛覚伝達系</li> <li>5. 痛みの中枢回路 I 痛みと情動の回路（前帯状回、島皮質、扁桃体）</li> <li>6. 痛みの中枢回路 II 脳画像による解析</li> <li>7. 下行性疼痛調節系、痛みが慢性化する脳メカニズム</li> <li>8. 痛みの評価法、薬物療法</li> <li>9. 慢性痛各論 I CRPS（複合性局所疼痛症候群）</li> <li>10. 慢性痛各論 II 帯状疱疹後神経痛</li> <li>11. 慢性痛各論 III 線維筋痛症</li> <li>12. 慢性痛各論 IV 整形外科的な痛み（椎間板ヘルニア、脊柱管狭窄症）</li> <li>13. 慢性痛各論 V 整形外科的な痛み（変形性膝関節症、五十肩）</li> <li>14. 慢性痛に対する運動療法の効果とそのメカニズム</li> <li>15. 痛みの性差について、まとめ：ペイン・リハビリテーションとは何か？</li> </ol>
教 科 書	スライド(iPad 使用)および参考資料のコピーにより授業を進める。
参 考 文 献	『痛みの集学的診療：痛みの教育コアカリキュラム』/日本疼痛学会、痛みの教育コアカリキュラム編集委員会（編）/真興交易(株)医書出版部/2016 年
成 績 評 価	後期試験、レポートなどによって総合的に評価する。 受講にあたって、予習・復習を十分行うこと。

科 目 名	老年期障害学
担 当 教 員	濱岡 克伺
単位、必修・選択	1単位 必修
履修対象・形態	3年次 前期 講義
授業科目概要	理学療法の臨床の場では単に疾病の治療やケアのみならず、日常生活活動（ADL）や生活の質（QOL）の向上を視野に入れた包括的な医療が要求されている。本講義では、加齢に伴う身体変化の特性をはじめ、老年者の基本的動作能力の障害を起こす代表的な疾病に関する診断、治療、その経過などの知識を習得し、老年者に起こりうる運動外傷とその障害予防に関する知識を深める。
授業の目的	老年者に対して理学療法を行う場合、健康維持の方法と疾病に伴って起こりやすい合併症や社会的自立を促すための支援体制とその福祉・介護事業についても理解する。
授業計画	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 加齢と老化</li> <li>2. 高齢者へのアプローチ</li> <li>3. 老年症候群①</li> <li>4. 老年症候群②</li> <li>5. 高齢者に多い疾患</li> <li>6. 高齢者のリハビリ・退院支援</li> <li>7. 高齢者の終末期医療</li> <li>8. 総括</li> </ol>
教科書	『標準理学療法学・作業療法学 老年学』/第4版/大内尉義 編/医学書院/2014年
参考文献	『老人のリハビリテーション』/第8版/福井圀彦 著/医学書院/2016年
成績評価	前期試験で評定する。十分な予習と復習をして授業を受講すること。

科 目 名	発達障害学
担 当 教 員	宇野 里砂
単位、必修・選択	2単位 必修
履修対象・形態	3年次 後期 講義
授 業 科 目 概 要	子どもの運動・認知・社会性・言葉・食べる機能の正常発達を学習する。それらの知識を基盤に小児理学療法の主たる対象である運動発達障害（脳性麻痺、ダウン症候群、二分脊椎、筋ジストロフィー、重症心身障害）、発達障害（自閉スペクトラム症、注意欠如・多動症、限局性学習障害）について学習する。障害がある子どもと家族の支援について考える。
授 業 の 目 的	理学療法士として、障害がある子どもと家族を支援するために必要な基礎知識を習得する。多面的な知識を統合して思考する能力を高める。
授 業 計 画	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 運動の発達</li> <li>2. 認知の発達、社会性の発達</li> <li>3. 言葉の発達、食べる機能の発達</li> <li>4. 反射と反応</li> <li>5. 発達評価</li> <li>6. 脳性麻痺総論</li> <li>7. 脳性麻痺各論（痙直型四肢麻痺）</li> <li>8. 脳性麻痺各論（痙直型両麻痺）</li> <li>9. 脳性麻痺各論（痙直型片麻痺・アテトーゼ型・失調型）</li> <li>10. ダウン症候群</li> <li>11. 二分脊椎</li> <li>12. 筋ジストロフィー</li> <li>13. 重症心身障害、子どもの呼吸障害</li> <li>14. 自閉スペクトラム症、注意欠如・多動症、学習障害</li> <li>15. 子どもと家族への支援・連携、小テスト</li> </ol>
教 科 書	『小児科学 標準理学療法学・作業療法学 専門基礎分野 第5版』/奈良勲・他（編）/医学書院/2018年
参 考 文 献	『小児リハビリテーション医学 第2版』/栗原まな/医歯薬出版/2015年 『やさしく学ぶからだの発達』/林万里（監修）/全国障害者問題研究会出版部/2011年 『やさしく学ぶからだの発達 <Part2>』/林万里（監修）/全国障害者問題研究会出版部/2015年
成 績 評 価	講義態度等 20%、小テスト 80% 受講にあたって、予習・復習を十分行い、発表や質問を積極的にすること。

科 目 名	リハビリテーション医学
担 当 教 員	大澤 傑
単位、必修・選択	2単位 必修
履修対象・形態	2年次 前期・後期 講義
授業科目概要	現代の医療問題のキーワードは運動器・障害者・高齢者である。これら諸問題においてリハビリテーション（リハ）医学は中心的役割を持つ。上記を対象とした研究は社会からの期待・要請が大きいこともあり、リハ医学の基本から最先端の研究まで幅広く知識を得ることは非常に重要と考えられる。本講義においては、知識を深めるだけでなく学生自身の研究への端緒や示唆が得られるようにキーワードを中心に講義を進めていく。
授業の目的	本講義では対象となる脳・脊髄の損傷、神経・筋疾患、切断などに対する理解を深め、機能障害、能力低下、社会的不利、社会参加というリハビリテーション（リハ）医学的な観点で疾患を評価・治療することを学び、社会におけるリハ医療の意義を理解させる。さらに、予防医学としてのリハを考え、公衆衛生学的にも社会貢献できる為の基礎知識を身につける。
授業計画	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. リハ医学と社会</li> <li>2. リハ医学の歴史と障害、その評価</li> <li>3. サルコペニア</li> <li>4. 脳障害とリハ1</li> <li>5. 脳障害とリハ2</li> <li>6. 神経・筋疾患に対するリハ</li> <li>7. 運動器疾患に対するリハⅠ 大腿骨近位部骨折など</li> <li>8. 運動器疾患に対するリハⅡ 関節リウマチなど</li> <li>9. 脊髄障害とリハ1</li> <li>10. 脊髄障害とリハ2</li> <li>11. がんリハ1</li> <li>12. がんリハ2</li> <li>13. 循環器系のリハ</li> <li>14. 呼吸器のリハ</li> <li>15. 糖尿病と切断のリハ</li> </ol>
教科書	『リハビリテーション医学』/真柄 彰、鴨下 博編/理工図書/2017年
参考文献	『今日のリハビリテーション指針』/医学書院
成績評価	後期試験（筆記試験）と毎回の小テストおよび授業態度を総合的に判定する 受講にあたって、講義内容のプリントをあらかじめ配布するので予習・復習を十分行うこと



科 目 名	生活支援学（リハビリテーション工学）
担 当 教 員	濱岡 克伺
単位、必修・選択	2単位 選択
履修対象・形態	1年次 後期 講義
授 業 科 目 概 要	生活支援に関連する学術領域としてリハビリテーション工学、福祉工学、支援工学などがあり、高齢者と障害者のための技術開発が、多くの学会と福祉実務者によって行われている。その体系化は 2001 年の日本生活支援工学会の結成にはじまった。一方、2015 年の介護保険制度改正では新しい総合事業において生活支援コーディネーターが置かれた。工学と地域福祉の両面から生活支援をとらえ、理学療法士の教養とする。また、希望者には高齢者の生活支援の体験を勧める。
授 業 の 目 的	少子高齢社会で理学療法を実践するにあたって当該分野の基礎的な知識の習得が求められている。異なる専門分野の職種が障害者・高齢者にかぎらず人々すべての幸せな人間関係を築くうえで連絡や協力をするために共通言語としての本講義での知識を持つことが求められる。福祉住環境コーディネーター3級のテキストも活用し、実践的な知識を効率的に習得する。介護予防についても概観する。
授 業 計 画	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. リハビリテーション工学・生活支援工学の定義</li> <li>2. わが国における「障害者」の定義</li> <li>3. 暮らしやすい生活環境をめざして</li> <li>4. 支援機器活用のポイント</li> <li>5. 健康と自立をめざして ヘルスプロモーション 認知症予防</li> <li>6. 日常生活動作の支援 自助具・義手・義足・装具・ロボットアーム</li> <li>7. バリアフリーとユニバーサルデザイン アクセシブルデザイン</li> <li>8. 姿勢保持・移乗の支援 スライディングボード リフト</li> <li>9. 移動の支援 杖・歩行器・車椅子</li> <li>10. コミュニケーション・機器操作・認知障害への支援</li> <li>11. 安全・安心・快適な住まい</li> <li>12. 人にやさしい生活環境 住環境</li> <li>13. 人にやさしい生活環境 都市環境</li> <li>14. 安心できる住生活とまちづくり</li> <li>15. 高齢者の生活支援 障害者とバリアフリー まとめ</li> </ol>
教 科 書	『生活支援工学概論』/日本生活支援工学会 日本リハビリテーション工学協会 共編/コロナ社/2013年
参 考 文 献	『福祉住環境コーディネーター検定試験 3級公式テキスト 改訂5版』/東京商工会議所/2019年
成 績 評 価	<ul style="list-style-type: none"> <li>・後期試験期間中に試験を実施(70点)</li> <li>・平常点等(30点)</li> <li>・平常点解説：レポート感想等。私語、教科書なしはその回分はゼロ点。</li> <li>・受講にあたって、予習・復習を十分行うこと。</li> </ul>

科 目 名	チーム医療学
担 当 教 員	中原 英子、栗田 剛寧、西田 斉二
単位、必修・選択	1単位 必修
履修対象・形態	2年次 前期 講義
授業科目概要	<p>臨床において治療に関わる多くの医療従事者のなかでも、リハビリテーションに関わる職種がそれぞれの立場から、チーム医療の役割と責務について講義し、意思疎通のとれたチームワークが患者主体の医療においてどのように貢献するかを具体的に学習する。</p> <p>(中原) チーム医療のリーダーの立場から、チーム医療について解説し、その目的や役割を学ぶ。また医師の立場から、患者の権利を明確にし、インフォームドコンセント、他のスタッフへの指示や連携のとり方について事例を紹介して解説する。</p> <p>(栗田) チーム医療の実践として、リハビリテーション全般の立場から、コミュニケーションや情報の共有の重要性を解説する。また、理学療法士の立場から治療の段階的なアプローチ(病期別アプローチ)を踏まえて、リハビリテーションの他職種との連携、クリティカルパスやその運用について事例を紹介して解説する。</p> <p>(西田) リハビリテーション専門職にとって、チーム医療とはどのような意味を持つか。また、お互い深く連携を取るべき作業療法士のもつ特徴についても解説する。チーム医療を形成・維持する上で大切なポイントについて、分かりやすく解説する。</p>
授業の目的	<p>医療技術の多様化、先鋭化に伴って、医療従事者の専門は多岐に分化してきた。複数の医療職が共働する事は常態化しているが、真の意味での「協同」が良質な医療サービスを提供するうえでの不可欠の要素である。</p> <p>真のチーム医療について、今日的意味、情報の公開、口頭や書面での記録・伝達の技術について理解を深めていく。また、聞き取りの演習や、作業療法士の役割を具体的に知ることで、臨床実習に活用できる知識とする。</p>
授業計画	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. チーム医療の意義と必要性 (中原)</li> <li>2. 患者を主体とした医療従事者に求められる責務 (中原)</li> <li>3. チーム医療における医師の役割 (中原)</li> <li>4. 理学療法士の専門性と役割 (栗田)</li> <li>5. リハビリテーション専門職にとってのチーム医療 (西田)</li> <li>6. 作業療法士の専門性と役割 (西田)</li> <li>7. 情報の共有と記録 (栗田)</li> <li>8. チーム医療におけるコミュニケーション・スキル (栗田)</li> </ol>
教科書	『チーム医療論』/鷹野和美 編著/医歯薬出版/2002年
参考文献	講義内で適宜紹介する
成績評価	前期試験 80%、課題レポート 20%により総合評価する。 受講にあたって、予習・復習を十分行うこと。

科 目 名	感染対策
担 当 教 員	藤原 正昭
単 位、必 修・選 択	1 単 位 必 修
履 修 対 象・形 態	1 年 次 前 期 講 義
授 業 科 目 概 要	感染症はかつては人類にとって最も危険な疾病であった。抗生物質の発見、予防接種の発明により、脅威の度合いは低くなったとはいえ、現在もなお危険な疾病であることに変わりはない。ことに、エボラ出血熱、ジカ熱など従来みられなかった新たな感染症もみられるようになってきている。また、多剤耐性の細菌の誕生もあり、新たな脅威が加わっている。こうした状況のなかで、感染対策を知ることは医療人として必須である。感染症の疫学、症状、予防法などについて講義する。
授 業 の 目 的	季節性のある感染症に対しては、流行時期を知ることにより、有効な予防を行うことが可能となる。症状を知ることによって感染者の発見を容易にすることができる。そのうえでの確かな予防法を講じることが可能となる。以上のように感染症に対する理解を深め、感染症に対する正しい予防法をみにつける。
授 業 計 画	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 感染対策の歴史。スタンダードプリコーション。</li> <li>2. 感染経路別予防対策</li> <li>3. 病原体の種類、日和見感染症</li> <li>4. 結核について。</li> <li>5. ウィルス感染症について。</li> <li>6. HIV 感染症。</li> <li>7. 針刺し事故、ウィルス性肝炎について。</li> <li>8. 関連法規について。</li> </ol>
教 科 書	『病院感染対策ガイドライン 改訂第2版』/じほう刊
参 考 文 献	なし
成 績 評 価	前期試験、授業態度等により総合的に評価する。 受講にあたって、予習・復習を十分行うこと。

科 目 名	医療安全学
担 当 教 員	横山 浩誉
単位、必修・選択	1単位 必修
履修対象・形態	2年次 後期 講義
授 業 科 目 概 要	医療の質と安全の確保は、患者や医療従事者をはじめとする多くの国民が願っていることである。本講義では、歴史と動向をたどりながら、医療安全への関心を高め、その基本や実践について学習する。
授 業 の 目 的	日本では、医療安全について厚生行政の一環として医療安全体制整備の取り組みが行われている。専門職の立場から医療安全についての基本的な知識と実践をケーススタディを交え学習することを目的とする。
授 業 計 画	1. 医療安全とリスクマネジメントの概念（歴史と動向）
	2. 医療におけるリスクマネジメントの基本と方針
	3. 医療事故のメカニズムとその対策
	4. 効率的な医療安全管理
	5. 医療事故に対する倫理と法的問題
	6. 医療のリスクマネジメントのプロセスとその実践（リスクの分析）
	7. ケーススタディ（起こりやすい医療事故とその対策）
	8. 学習内容の振り返りと理解の確認
教 科 書	特に指定しない（資料配布予定）
参 考 文 献	『医療安全とリスクマネジメント』/嶋森好子・任和子著/ヌーヴェルヒロカワ
成 績 評 価	授業への参加状況（20%）および後期試験（80%） 受講にあたって、予習・復習を十分行うこと。

科 目 名	理学療法学概論
担 当 教 員	幸田 利敬、松田 淳子、松尾 高行、粕渕 賢志、助川 明、井坂 昌明、 神里 巖、松野 悟之、濱岡 克伺、鶴崎 智史、栗田 剛寧、山野 宏章、 国宗 翔、水野 稔基
単 位、必 修・選 択	2 単 位 必 修
履 修 対 象・形 態	1 年 次 前 期 講 義
授 業 科 目 概 要	授業計画（「理学療法とは」「理学療法の歴史」「理学療法的手段」「理学療法の対象」「理学療法の流れ」「障害構造」「理学療法士が活躍する場」「理学療法の教育と研究」「理学療法士が知っておくべき法制度」「理学療法士に必要な管理と運営」「診療報酬および倫理」）の通り、理学療法の全体像と展開を構造的に学習する。
授 業 の 目 的	理学療法の全体像と展開を構造的に理解することを通して、理学療法への興味・関心を高め、その後の学習へのスムーズで能率的な導入を図ること。
授 業 計 画	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. リハビリテーションと理学療法（幸田）</li> <li>2. 理学療法の定義と法規（幸田）</li> <li>3. 理学療法の倫理（幸田）</li> <li>4. 理学療法士に求められる能力（幸田）</li> <li>5. 理学療法の歴史、PT が活躍する場（助川）</li> <li>6. 神経系の障害と理学療法（松田）</li> <li>7. スポーツ傷害理学療法とは（松尾）</li> <li>8. 運動器障害と理学療法（粕渕）</li> <li>9. 内部障害と理学療法の関わり（井坂）</li> <li>10. 運動療法とは（神里）</li> <li>11. 回復期リハビリテーションの役割と在宅復帰の関わり方（松野）</li> <li>12. 理学療法の実際（濱岡、鶴崎、栗田、山野、国宗、水野）</li> <li>13. 理学療法の実際（濱岡、鶴崎、栗田、山野、国宗、水野）</li> <li>14. 理学療法の実際（濱岡、鶴崎、栗田、山野、国宗、水野）</li> <li>15. 理学療法の実際（濱岡、鶴崎、栗田、山野、国宗、水野）</li> </ol>
教 科 書	特に指定せず、必要に応じて資料を配布する
参 考 文 献	『理学療法概論 第4版』千住秀明（監修）/神陵文庫/2013年 『理学療法概論 第6版』奈良 勲（編）/医歯薬出版/2013年
成 績 評 価	前期試験及び小テストにより総合評価する。 受講にあたって、予習・復習を十分行うこと。

科 目 名	運動療法学
担 当 教 員	神里 巖
単 位、必 修・選 択	1 単 位 必 修
履 修 対 象・形 態	1 年 次 後 期 講 義
授 業 科 目 概 要	運動療法を適切に行うための基礎的な知識を習得することを目的とする。理学療法の中核に位置づけられている運動療法の概念についての理解を深め、運動器系解剖学、内臓系解剖学、運動器系生理学、内臓系生理学や運動学等の科目と関連付けながら、基礎的な運動療法について教授する。運動療法の対象疾患・障害、運動療法の適応と禁忌、リスク管理、運動の阻害因子、運動療法の目的と治療計画立案など基礎理論を学習する。
授 業 の 目 的	運動療法の対象となる病態を具体的に把握し、運動器や神経系疾患、内部障害など目的に合わせた運動手技について理解する。理学療法の基盤となる運動療法の基本手技を紹介し、その対象となる身体機能障害を理解する。また運動療法の注意点や禁忌、リスクを具体的に理解して、基礎となる運動療法手技の理論背景を理解する。
授 業 計 画	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 運動療法の概要</li> <li>2. 関節可動域制限の病態と運動療法</li> <li>3. 筋力増強練習と運動療法</li> <li>4. 運動制御</li> <li>5. 運動と呼吸・循環</li> <li>6. 運動と代謝</li> <li>7. 持久力増強運動</li> <li>8. 協調性運動</li> </ol>
教 科 書	『第2版 運動療法学－障害別アプローチの理論と実際』/市橋則明 編集/文光堂/2014年
参 考 文 献	『標準理学療法 運動療法学各論 第4版』/吉尾雅春 編集/医学書院/2017年
成 績 評 価	後期試験 80%、小テスト 20%により総合評価する。 受講にあたって、予習・復習を十分行うこと。

科 目 名	運動療法学演習
担 当 教 員	神里 巖
単位、必修・選択	1単位 必修
履修対象・形態	2年次 前期 演習
授 業 科 目 概 要	運動療法は理学療法の根幹を成している。運動療法は障害に対するアプローチとして位置づけられており、関節可動域制限や筋力低下などを対象に実施される。近年では概念の拡大により全身状態や内臓機能の改善、障害予防などが運動療法の対象とされている。上記を踏まえ、運動療法学演習では運動療法の知識や治療技術について演習により学習する。
授 業 の 目 的	運動療法は運動学や解剖学、生理学などを背景に理学療法士にとって必要不可欠な分野である。理学療法士は脳血管疾患や運動器疾患などの患者に対して病態や生活を把握し、適切な運動療法を行わなければならない。実施される運動療法には臨床での経験則に偏らず、経験とエビデンスを抱合した効果的な運動療法が求められる。本講義では運動療法の定義や基礎知識、技術について概説し、臨床に即した運動療法の具体的方法について理解することを目的とする。
授 業 計 画	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 運動療法の概念</li> <li>2. 足関節・足部の運動療法（テーピング）</li> <li>3. 基本的な運動療法（1）</li> <li>4. 基本的な運動療法（2）</li> <li>5. 肩関節と肩甲帯の運動療法</li> <li>6. 肘関節と前腕の運動療法</li> <li>7. 変形性関節症の運動療法（1）</li> <li>8. 変形性関節症の運動療法（2）</li> <li>9. 脊椎疾患の運動療法</li> <li>10. 股関節の運動療法</li> <li>11. 膝関節の運動療法</li> <li>12. 足関節・足部の運動療法</li> <li>13. 脳卒中の運動療法</li> <li>14. 切断の運動療法</li> <li>15. その他疾患の運動療法・補足</li> </ol>
教 科 書	『局所と全身からアプローチする運動器の運動療法』/小柳磨毅・編/羊土社 /2017年
参 考 文 献	適時紹介・配布する。
成 績 評 価	前期試験（実技及び記述試験）、授業時の態度を加味して総合評価する。受講にあたって、予習・復習を十分行うこと。

科 目 名	物理療法学
担 当 教 員	鶴崎 智史
単位、必修・選択	1単位 必修
履修対象・形態	1年次 後期 講義
授業科目概要	物理療法が及ぼす生体反応とその治療効果を学ぶことを目的とする。物理療法は温熱、音、光線、電気、牽引、徒手（マッサージを含む）等の物理的エネルギーを外部から身体部分に適用し、痛みを和らげ、血液循環を改善し、リラクゼーションをはかるなどの目的で行われる治療法である。運動器系・内臓系解剖学、運動器系・内臓系生理学や物理学等の知識を関連付けながら物理療法の生体反応を学習し、温熱・寒冷療法、超音波療法、電気刺激療法、水治療法、牽引療法等の各種療法の目的、作用、適応と禁忌、実施方法と留意点を学ぶ。さらに、物理療法を行う際のリスク管理についても学習し理解する。
授業の目的	基礎物理学を理解することから物理的エネルギーを理学療法に応用できる能力を身につける。物理的エネルギーの身体への影響を知り、物理エネルギーが治療に応用できることと危険性を多く含んでいることを理解する。 知識の蓄積に終始するのではなく、臨床を支えるため基礎学問にまで理解を求める学習姿勢を身につけ、治療応用への科学的根拠を求めてほしい。応用性と柔軟性を持った自らの考えをもち、根拠のある治療展開ができるようになってほしい。また、物理療法機器の安全な取り扱い方を理解する。
授業計画	1. 物理療法の定義、臨床的意義、概論 2. 熱エネルギーに対する生体反応と影響(温熱、寒冷治療など) 3. 電気エネルギーに対する生体反応と影響(電氣的検査など) 4. 電気エネルギーに対する生体反応と影響(低周波治療など) 5. 超音波エネルギーに対する生体反応と影響(超音波治療など) 6. 電磁エネルギーに対する生体反応と影響(マイクロ波治療など) 7. 光エネルギーに対する生体反応と影響(赤外線、紫外線、レーザー治療など) 8. 力学エネルギーに対する生体反応と影響(牽引、水治療など)
教科書	『物理療法学 第2版』/金原出版
参考文献	資料配布
成績評価	後期試験 90%、レポート 10%により総合評価する。 受講にあたって、予習・復習を十分行うこと。



科 目 名	物理療法学演習
担 当 教 員	幸田 利敬
単位、必修・選択	1単位 必修
履修対象・形態	2年次 前期 演習
授業科目概要	<p>物理療法学で学習した各療法の目的、作用、適応と禁忌を踏まえ、生体に対して安全に物理療法を施行する技術を習得することを目的とする。学生間で患者と治療者の役割を決め、主要な理学療法の対象疾患を想定して各種療法の計画を立案し実施する。実際に温熱・寒冷療法、超音波療法、電気刺激療法、水治療法、牽引療法等の各療法を施行して、どのような生理的変化が生じるかを体験学習する。物理療法機器の適切な取り扱いと管理方法についても学習する。</p> <p>毎回、該当分野の予習をし、臨床を意識した緊張感をもち演習を行うこと。</p>
授業の目的	<p>物理的エネルギーを理学療法に応用できる能力を身につける。物理的エネルギーの身体への影響を知り、治療に応用できることと危険性を理解する。また、物理療法機器の安全な取り扱い方と適切な治療技術を養う。</p> <p>演習では、学生は物理療法を施行する側と受ける側の両方を体験することで、対象者の受ける感覚を感じ取る。</p> <p>紋きり型の知識蓄積に終始するのではなく、応用性と柔軟性を持った自らの考えをもち、根拠のある治療展開ができるようになってほしい。</p> <p>グループ実習を取り入れるので、積極的に学習を進め多くの体験をするようにして下さい。</p>
授業計画	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. オリエンテーション(演習方法、注意事項、物理療法概論 など)</li> <li>2. 物理療法の目的、分類</li> <li>3. 物理療法における臨床推論</li> <li>4. 温熱・寒冷療法の実際(適応と禁忌及びデモンストレーション等)</li> <li>5. 高周波治療の実際(適応と禁忌及びデモンストレーション等)</li> <li>6. 超音波治療の実際(適応と禁忌及びデモンストレーション等)</li> <li>7. 低周波治療の実際(適応と禁忌及びデモンストレーション等)</li> <li>8. 牽引療法、光線療法の実際(適応と禁忌及びデモンストレーション等)</li> <li>9. }</li> <li>10. 電気刺激療法、高周波療法、光線療法、牽引療法、超音波療法、</li> <li>11. 温熱・寒冷療法等の演習を行う。</li> <li>12. グループに分かれ各週の課題(症例を想定しての実施、効果判定</li> <li>13. を実験により確認)の遂行。</li> <li>14. }</li> <li>15. 水治療法の演習(夏季に別途時間を設けて実施する)</li> </ol>
教科書	『物理療法学』/金原出版
参考文献	なし
成績評価	<p>前期試験 40%、課題レポート 60%により総合評価する。再試験は実技試験とする。各項目のレポートは全て指定期限を厳守すること。</p> <p>受講にあたって、予習・復習を十分行うこと。</p>

科 目 名	日常生活活動学
担 当 教 員	神里 巖
単位、必修・選択	1単位 必修
履修対象・形態	2年次 後期 講義
授 業 科 目 概 要	理学療法士は患者の障害とADLとの関連を正しくとらえ、一人一人の生活スタイルに合った具体的なADLの指導とQOLを高める視点が求められる。本講義では、理学療法におけるADLの位置づけ、ADLの運動学的分析、ADL評価、食事、排泄、整容、更衣、入浴などのADL動作をはじめ、歩行補助具や車椅子など移動動作に関する指導法の基礎的な知識を修得することを目的とする。
授 業 の 目 的	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. ADLの概念の発展を理解し、ADLの範囲と評価項目との関連を学ぶ。</li> <li>2. ICFを軸に障害と理学療法の関わりを理解し、QOLを高める方法を学ぶ。</li> <li>3. 基本動作を含むADL動作を運動学的にとらえ分析することを学ぶ。</li> <li>4. ADL評価の目的を理解し、主なADL評価法の概略を学ぶ。</li> <li>5. 歩行補助具や車椅子の機能と適応を理解し、これらの基本的な指導法を学ぶ。</li> </ol>
授 業 計 画	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. ADLの概念と範囲</li> <li>2. ADLと障害</li> <li>3. ADLとQOL</li> <li>4. ADLの運動学的分析</li> <li>5. ADL評価：Barthel Index</li> <li>6. ADL評価：FIM</li> <li>7. ADL支援する機器：自助具・日常生活用具・車椅子</li> <li>8. 起居介助・トランスファーの方法・生活環境学</li> </ol>
教 科 書	『日常生活活動学・生活環境学 第4版』/鶴見隆正 編集/医学書院/2009
参 考 文 献	『動作分析 臨床活用講座 バイオメカニクスに基づき臨床推論の実践』/石井慎一郎/メディカルビュー社/2013年
成 績 評 価	講義中の課題と小テスト・後期試験を総合して評価する。授業に際しては、十分な予習と復習をすること

科 目 名	日常生活活動学演習
担 当 教 員	神里 巖
単位、必修・選択	1単位 必修
履修対象・形態	3年次 前期 演習
授 業 科 目 概 要	日常生活活動学で学んだことを基に実技を通して、対象者の日常生活・環境を分析・評価し生活動作の自立にむけた実践的な理学療法及び指導等について学ぶことを目的とする。本演習では学生間で患者と治療者の役割を決め、主要な理学療法の対象疾患を想定して、食事、排泄、入浴、更衣や整容動作のほか家事動作や移動動作等の能力障害評価や各動作の訓練方法、効率的な介助方法を実技により教授する。
授 業 の 目 的	本授業の目的は、①代表的な日常生活活動の評価法を学び実践する、②日常生活活動学での知識を基に、障がい別に日常生活活動や生活関連動作の評価や動作指導、介助方法等を体験を通して学ぶ、③事例検討を通して、さらに日常生活活動や生活環境の評価や分析、動作指導や介助方法等の学びを深める、ことである。
授 業 計 画	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 総論：オリエンテーション</li> <li>2. ポジショニング，歩行補助具，車椅子演習①</li> <li>3. ポジショニング，歩行補助具，車椅子演習②</li> <li>4. ADL指導の実際：片麻痺①</li> <li>5. 演習：片麻痺②</li> <li>6. 演習：片麻痺③</li> <li>7. ADL指導の実際：脊髄損傷①</li> <li>8. 演習：脊髄損傷②</li> <li>9. 演習：脊髄損傷③</li> <li>10. ADL指導の実際：高齢者①</li> <li>11. 演習：高齢者②</li> <li>12. ADL指導の実際：各疾患の障害構造の把握と介入方法の検討①</li> <li>13. 各疾患の障害構造の把握と介入方法の検討②</li> <li>14. 各疾患の障害構造の把握と介入方法の検討③</li> <li>15. 総括</li> </ol>
教 科 書	『ADL』/第1版/柴喜崇 編/羊土社/2015
参 考 文 献	『福祉住環境コーディネーター検定試験 2級公式テキスト』/改訂4版/東京商工会議所 編/2016
成 績 評 価	前期試験と課題レポートで評定する。授業に際しては十分な予習と復習をすること

科 目 名	理学療法評価学
担 当 教 員	国宗 翔
単位、必修・選択	2単位 必修
履修対象・形態	1年次 後期 講義
授 業 科 目 概 要	理学療法評価学では、①個々の疾患に加え、それらによって生じた障害構造の特徴や重症度を、国際生活機能分類（ICF）を通して学ぶ。また、②理学療法臨床推論によって、病態や障がい構造を究明し、理学療法における目標設定やプログラムの立案方法を学ぶ。
授 業 の 目 的	理学療法士として理学療法評価学の意味を理解し、ICFにより障がい構造を把握するとともに、理学療法の方法設定やプログラムの立案方法を学ぶことを目的とする。疾患の予習、問診、検査・測定方法の学習を通して、理学療法臨床推論を行い、目標設定や理学療法プログラム立案の動機づけとなるよう進める。
授 業 計 画	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 総論（国際生活機能分類：ICF）</li> <li>2. 評価の基礎と進め方医療面接と情報収集</li> <li>3. 意識障害・全身状態の見方</li> <li>4. 脳神経，高次脳機能</li> <li>5. 気分（うつ・不安）・思考の評価，意欲・自己効力感</li> <li>6. 摂食・嚥下，姿勢・形態測定，</li> <li>7. 感覚，痛み，</li> <li>8. 反射，筋緊張，ROM</li> <li>9. MMT，姿勢バランス，</li> <li>10. 協調性，持久力</li> <li>11. 上肢機能，ADL</li> <li>12. QOL，動作分析運動発達</li> <li>13. 理学療法臨床推論・統合と解釈</li> <li>14. 目標設定と治療プログラムの立案</li> <li>15. 総括</li> </ol>
教 科 書	『リハビリテーション基礎評価学』/潮見泰蔵，下田信明編/羊土社/2015年
参 考 文 献	『ICF 国際生活機能分類』/世界保健機構/中央法規出版/2008年
成 績 評 価	後期試験により評定する。十分な予習と復習をして授業を受講すること。

科 目 名	運動器障害評価法 I
担 当 教 員	松野 悟之
単 位、必 修・選 択	1 単 位 必 修
履 修 対 象・形 態	2 年 次 前 期 演 習
授 業 科 目 概 要	骨格は骨で構成され、関節は骨と骨とが可動的に結合したものである。理学療法を展開していく過程でまず必要なのは、障害者の骨と関節の機能が何の成因で障害されているか把握することである。その問題点を捉えるために骨格系の障害を評価、検討し、理学療法プログラムを設定する必要がある。理学療法における骨格系運動機能評価の位置づけや、形態測定(四肢長、周径測定)、異常アライメントの検査、関節可動域測定などの意義とその方法について教授する。
授 業 の 目 的	機能評価の基本となる機能解剖を踏まえた上で、正常者の評価をおこない、さらに骨格系の障害に対する具体的評価法を学ぶ。上肢、下肢、体幹の全体的形態測定(四肢長、周計測定)、変形・拘縮に起因する異常なアライメントや関節可動域測定などの意義を合わせて学ぶ。
授 業 計 画	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 評価の意義</li> <li>2. 形態測定(四肢長)</li> <li>3. 形態測定(周径)</li> <li>4. アライメントの評価</li> <li>5. 関節可動域(ROM)測定</li> <li>6. 肩関節の評価</li> <li>7. 肩関節・肩甲帯の評価</li> <li>8. 肘関節・手関節の評価</li> <li>9. 体幹の評価</li> <li>10. 股関節の評価</li> <li>11. 膝関節・足関節の評価</li> <li>12. 関節可動域制限について</li> <li>13. 関節可動域制限について</li> <li>14. まとめ・これまでの総括、実技試験における確認事項</li> <li>15. まとめ・これまでの総括、実技試験における確認事項</li> </ol>
教 科 書	『15 レクチャーシリーズ 理学療法テキスト 理学療法評価学 I』/石川朗 他編/ 中山書店 『PT・OTのための測定評価 DVD シリーズ 1 ROM 測定 第2版』/伊藤俊一 他編/ 三輪書店
参 考 文 献	『標準理学療法学専門分野 理学療法評価学』/内山靖 編/医学書院
成 績 評 価	前期試験と実技試験、レポートを総合して評価する。 講義に関して、十分な予習と復習をすること。

科 目 名	運動器障害評価法Ⅱ
担 当 教 員	山野 宏章
単位、必修・選択	1単位 必修
履修対象・形態	2年次 前期 演習
授業科目概要	理学療法の対象者の多くが筋力低下をはじめ筋機能に関連した様々な治療上の問題を有している。そのため、筋力低下の予防、筋機能の維持・改善は理学療法の中でも中心となる課題である。この講義では、理学療法における筋の基礎知識および筋系の評価の位置づけ、上肢・下肢・体幹の筋力検査、筋持久力検査、筋の柔軟性評価、機器を用いた筋機能測定等（筋力検査、筋持久力検査、筋電図等）の意義とその方法について学ぶ。
授業の目的	理学療法における筋系障害の評価の理論と技術を学ぶことを目的とする。筋力低下のメカニズムを理解し、筋系の運動機能評価の位置づけ、評価の方法を講義、演習にて理解し筋系障害に対する一連の評価の流れを習得する。
授業計画	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 筋力検査の基礎</li> <li>2. 徒手筋力検査（肩甲骨の運動）</li> <li>3. 徒手筋力検査（肩関節の運動）</li> <li>4. 徒手筋力検査（肘関節・前腕の運動）</li> <li>5. 徒手筋力検査（手関節・手指の運動）</li> <li>6. 徒手筋力検査（上肢まとめ）</li> <li>7. 徒手筋力検査（股関節の運動）</li> <li>8. 徒手筋力検査（膝関節の運動）</li> <li>9. 徒手筋力検査（足関節・足趾の運動）</li> <li>10. 徒手筋力検査（下肢まとめ）</li> <li>11. 徒手筋力検査（頭頸部の運動）</li> <li>12. 徒手筋力検査（体幹の運動）</li> <li>13. 機器を用いた筋力検査</li> <li>14. 機能テスト・筋の柔軟性評価</li> <li>15. 徒手筋力検査（全体のまとめ）</li> </ol>
教科書	『新 徒手検査法 原著第9版』協同医書出版社/2014年
参考文献	『15 レクチャーシリーズ 理学療法評価学Ⅰ』中山書店/2013年
成績評価	前期試験（筆記試験および実技試験）、各演習の小テスト（口頭試問および実技試験）および発表（実演）により総合評価する。なお、演習に関して十分な予習と復習をすること。

科 目 名	神経障害評価法
担 当 教 員	濱岡 克伺
単位、必修・選択	1単位 必修
履修対象・形態	2年次 後期 演習
授業科目概要	中枢神経疾患の病変によって生じる意識・運動・感覚・認知などの障害像を把握し評価を行うためには、これまで学んできた神経学や運動発達学をもとに、随意運動発現のメカニズム、脳の機能局在の役割、運動と高次脳機能の関係などの知識が必要である。本講義では、神経疾患を起因とする機能障害の構造の質的变化を把握するために必要とされる検査および評価の意義・目的を理解し、それらの基本的技術や記録の方法などについて学習する。
授業の目的	随意運動発現のメカニズムについて理解できる。 中枢神経疾患の種類と病態について理解できる。 中枢神経疾患の検査の目的を理解・説明できる。 中枢神経疾患の検査を、模擬患者を対象に実施できる。 検査の結果をもとに、問題点を抽出し解釈できる。
授業計画	1. 神経系障害の評価の目的と進め方 2. 反射の検査①(随意運動発現のメカニズムと反射機構、深部反射) 3. 反射の検査②(反射の意義と鑑別、表在反射・病的反射) 4. 感覚検査①(体性感覚野の機能と感覚系の伝導路、表在感覚の検査) 5. 感覚検査②(感覚検査の意義と鑑別、深部・複合感覚の検査) 6. 筋緊張の検査(痙縮の発現機序、静止時筋緊張・動作時筋緊張の検査他) 7. 運動麻痺の評価(片麻痺の回復過程とその評価, Brunnstrom recovery stage test) 8. 運動失調と協調性の検査(小脳の統御回路、運動失調とその分類、協調運動機能検査) 9. 姿勢反射の検査(姿勢の中枢制御と異常姿勢反射、立ち直り反応と平衡反応の検査) 10. バランステスト(BBT, FRT, TUG, 10m 歩行) 11. 神経系の画像評価 12. 脳神経の検査 13. 意識・認知症の検査(意識障害・認知症の概念、3-3-9 度方式・知能の検査) 14. 高次脳機能の検査(失語・失行の概念、半側空間無視・Pusher 症候群他) 15. 脳卒中総合評価法(SIAS, Fugl-Meyer 法)
教科書	『ベットサイドの神経の診かた 第18版』/田崎義昭、斎藤佳雄 著/南山堂/2016
参考文献	『病気がみえる 脳・神経』/医療情報科学研究所/メディックメディア/2012 『脳血管障害片麻痺に対する理学療法評価』(第2版)/鈴木俊明 監修/神陵文庫/2017
成績評価	講義中の実習状況と小テスト・後期試験(実技試験と筆記試験)を総合して評価する。 受講にあたって、予習・復習を十分行うこと。

科 目 名	内部障害評価法
担 当 教 員	井坂 昌明
単位、必修・選択	1単位 必修
履修対象・形態	3年次 前期 演習
授 業 科 目 概 要	内部障害の中核を担う呼吸、循環、代謝障害等の評価理論と技術を学ぶことを目的とする。内部障害の病態を理解するために必要な検査及び評価の目的、方法、技術などについて教授する。主に、フィジカルアセスメント、バイタルサイン、各機能評価について学習をすすめる。
授 業 の 目 的	内部障害に関する基本的な評価を学び、各病態の評価における理解を目的とする。そして、フィジカルアセスメント及びバイタルサインの評価については、適切に実施し、評価の意義を理解することを目標とする。
授 業 計 画	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 循環器（心臓）の理解と主な心疾患の病態</li> <li>2. 循環器（血管）の理解と主な心疾患の病態</li> <li>3. 循環機能を診る</li> <li>4. 呼吸器の理解と主な呼吸器疾患の病態</li> <li>5. 呼吸機能を診る</li> <li>6. 胸部画像を診る</li> <li>7. バイタルサインを診る①</li> <li>8. バイタルサインを診る②</li> <li>9. フィジカルアセスメント（視診・触診）①</li> <li>10. フィジカルアセスメント（視診・触診）②</li> <li>11. フィジカルアセスメント（打診・聴診）①</li> <li>12. フィジカルアセスメント（打診・聴診）②</li> <li>13. 代謝疾患の理解と主な疾患（糖尿病等）の病態</li> <li>14. 悪性腫瘍の病態理解</li> <li>15. 高齢者における病態</li> </ol>
教 科 書	『リハビリテーション基礎評価学』/潮見泰藏 下田信明 編集/羊土社/2015年 『PT・OT ビジュアルテキスト 内部障害理学療法学』松尾善美 編集/羊土社/2016年
参 考 文 献	『理学療法テキスト 内部障害理学療法学 循環・代謝 第2版』/木村雅彦 編集/中山書店/2017年 『理学療法テキスト 内部障害理学療法学 呼吸 第2版』/木村雅彦 編集/中山書店/2017年
成 績 評 価	前期試験、課題レポート、出席、授業態度等から総合的に評価する。受講にあたって、予習復習を必ず行うこと。



科 目 名	臨床運動学演習
担 当 教 員	国宗 翔
単位、必修・選択	1単位 必修
履修対象・形態	2年次 前期 演習
授 業 科 目 概 要	運動学で学んだ身体のメカニズムや運動の様相をもとに、疾病あるいは機能障害(impairment)による機能的制限(functional limitation)や障害(disability)の状態にある者を対象とした動作の観察・分析方法を学ぶ。講義前半では姿勢・動作分析に必要である運動力学・生体力学を学び、健常者の動作パターンを数多く観察する。講義後半では疾病・障害を有する対象者の特徴的な姿勢・動作を分析するための基本を学習する。また、計測装置を用いて、バイオメカニクスの姿勢・歩行の定量化を学ぶ。
授 業 の 目 的	人間の基本的動作である寝返り、起き上がり、立ち上がり、歩行について形態学的、運動学的、生体力学的な視点から観察・分析方法を習得し、臨床実習で担当する対象者の方が安全で有利な動作を選択できるよう基本を学んでいく。また、対象者の問題点抽出や治療計画立案までの思考過程を明らかにする手段として、疾患別の特徴的な姿勢や動作の観察・分析方法を学ぶ。
授 業 計 画	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 動作分析の目的</li> <li>2. 生体力学の基本</li> <li>3. 姿勢と保持（臥位、座位、立位）</li> <li>4. 正常動作①（寝返り）</li> <li>5. 正常動作②（起き上がり、床からの立ち上がり）</li> <li>6. 正常動作③（椅子からの立ち上がり）</li> <li>7. 正常動作④（歩行と走行）</li> <li>8. 正常動作⑤（ジャンプ動作）</li> <li>9. 歩行の異常</li> <li>10. 計測装置による分析①（三次元動作解析、床反力計）</li> <li>11. 計測装置による分析②（三次元動作解析、床反力計）</li> <li>12. 高齢者の姿勢・動作分析</li> <li>13. 脳卒中片麻痺患者の姿勢・動作分析①</li> <li>14. 脳卒中片麻痺患者の姿勢・動作分析②</li> <li>15. 運動失調症・パーキンソニズムの姿勢・動作分析</li> </ol>
教 科 書	『観察による歩行分析』医学書院/2005年 『15 レクチャーシリーズ 臨床運動学』中山書店/2015年
参 考 文 献	適宜必要な文献及び資料などを配布する
成 績 評 価	小テスト、課題レポート、前期試験により総合評価する。 受講にあたって、予習・復習を十分行うこと。

科 目 名	運動器障害理学療法
担 当 教 員	粕淵 賢志
単位、必修・選択	1単位 必修
履修対象・形態	3年次 前期 講義
授 業 科 目 概 要	<p>上肢・下肢、および脊椎等の運動器疾患の基礎的知識を理解したうえで、運動器の障害に対する理学療法を学ぶことを目的とする。運動器障害理学療法の対象となることの多い骨折や変形性関節症を中心に、脊椎疾患や靭帯損傷について、病態や機能評価から理学療法プログラムの設定、治療法の実際について講義する。</p>
授 業 の 目 的	<p>基本的な運動器疾患に関する基礎知識を学び、疾患の病態を理解する。また、具体的なプログラムの実施のために、病態を考慮した運動器の評価法と治療法の理解を目的とする。</p>
授 業 計 画	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 運動器障害の基礎知識</li> <li>2. 変形性股関節症の理学療法</li> <li>3. 変形性膝関節症の理学療法</li> <li>4. 大腿骨頸部骨折の理学療法</li> <li>5. その他の下肢骨折の理学療法</li> <li>6. 腰椎椎間板ヘルニアの理学療法</li> <li>7. 関節リウマチ・頸椎疾患の理学療法</li> <li>8. 膝靭帯損傷の理学療法</li> </ol>
教 科 書	『運動器障害理学療法学 改訂第2版』/細田多穂 監修/南江堂
参 考 文 献	<p>『局所と全身からアプローチする 運動器の運動療法』/小柳磨毅・他 編集/羊土社  『運動機能障害の「なぜ？」がわかる評価戦略』/工藤慎太郎 編集/医学書院</p>
成 績 評 価	<p>前期試験により評価する。  受講にあたって、予習・復習を十分行うこと。</p>

科 目 名	運動器障害理学療法演習
担 当 教 員	粕淵 賢志
単位、必修・選択	1単位 必修
履修対象・形態	3年次 前期 演習
授業科目概要	<p>上肢・下肢、および脊椎等の運動器障害の基礎的知識を理解したうえで、運動器の障害に対する理学療法を学ぶことを目的とする。上肢（骨折などの外傷、肩関節周囲炎、腱板損傷等）、下肢（変形性股関節・膝関節症、大腿骨頸部骨折、その他の骨折、靭帯損傷等）、脊椎（腰部脊柱管狭窄症、腰痛等）の疾患により生じる運動器の障害について機能評価から理学療法プログラム設定、治療法の実際について講義と演習を組み合わせながら実施していく。</p>
授業の目的	<p>脊椎および上肢・下肢等の運動器障害の基礎的知識を理解する。そのうえで、上記疾患等に対する機能評価が可能となり、疾患の病態を把握できるようになる。さらに、代表的な運動器の疾患については、理学療法をおこなう上での評価項目の立案やプログラムを設定し、一定の評価・治療法が実践できることを目的とする。</p>
授業計画	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 運動器障害の評価と治療</li> <li>2. 変形性股関節症の評価と治療</li> <li>3. 変形性膝関節症の評価と治療</li> <li>4. 大腿骨頸部骨折の評価と治療</li> <li>5. その他の下肢骨折の評価と治療</li> <li>6. 腰部脊柱管狭窄症の評価と治療</li> <li>7. 腰痛の評価と治療</li> <li>8. 手関節疾患の評価と治療</li> <li>9. 肘関節疾患の評価と治療</li> <li>10. 肩関節周囲炎の評価と治療</li> <li>11. 腱板損傷の評価と治療</li> <li>12. 肩関節疾患の評価と治療</li> <li>13. 足部疾患の評価と治療</li> <li>14. 足部靭帯損傷の評価と治療</li> <li>15. 膝靭帯損傷の評価と治療</li> </ol>
教科書	『運動器障害理学療法学 改訂第2版』/細田多穂 監修/南江堂
参考文献	<p>『局所と全身からアプローチする 運動器の運動療法』/小柳磨毅・他 編集/羊土社</p> <p>『運動機能障害の「なぜ？」がわかる評価戦略』/工藤慎太郎 編集/医学書院</p>
成績評価	<p>前期試験・実技試験により総合評価する。</p> <p>受講にあたって、予習・復習を十分行うこと。</p>

科 目 名	脳機能障害理学療法
担 当 教 員	松田 淳子
単位、必修・選択	1単位 必修
履修対象・形態	3年次 前期 講義
授 業 科 目 概 要	理学療法士の主要対象障害の一つである脳機能障害（中枢神経障害）の理学療法を実施するうえで、最低限知っておいてほしい疾患と中枢神経システムの理解、理学療法士が知るべき画像情報の見方と活かし方、脳障害の回復過程と理学療法士のかかわりかたについて学んでいただきます。
授 業 の 目 的	1. 理学療法士が関わる脳機能障害の病態を理解する 2. 対象者の障害を理解し、可能性を探れるようになるために、 ①脳のシステムを復習する ②基本的な脳画像の見方を学ぶ ③回復過程と回復に必要な関わりを学ぶ
授 業 計 画	1. 脳機能障害の定義と病態～脳血管障害～ 2. 脳機能障害の定義と病態～脳外傷など～ 3. 脳機能障害の画像をみるために～基本的な解剖の復習～ 4. 脳機能障害の画像をみるために～臨床でよく出会う画像を学ぶ～ 5. 患者さんを理解するために脳のシステムを復習する 6. 患者さんを理解するために脳のシステムを知る 7. 脳機能障害の回復過程 8. 脳機能障害の回復を促す関わり  *順番はもう一つの講義との関係で変わることがあります。
教 科 書	『標準理学療法学 神経理学療法学第2版』
参 考 文 献	『15 レクチャーシリーズ神経障害理学療法学Ⅰ』/大畑光司, 玉木彰編/中山書店 『脳卒中理学療法の理論と技術』/原寛美, 吉尾雅春編/メジカルビュー 『病気が見える vol.7 脳・神経 第2版』/メディックメディア その他、講義内で随時紹介します。
成 績 評 価	講義内で行う小テスト、前期試験、講義内課題等で判定します。 受講にあたって、予習・復習を十分行うこと。

科 目 名	脳機能障害理学療法演習
担 当 教 員	松田 淳子
単位、必修・選択	1単位 必修
履修対象・形態	3年次 前期 演習
授業科目概要	脳機能障害を持つ患者さんの障害像を把握し、能力を最大限引き出すためのかわりについて学んでいただきます。
授業の目的	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 脳機能障害に起因する障害を理解する</li> <li>2. 脳機能障害を有する対象者を評価できるようになる</li> <li>3. 脳機能障害を有する方のリスク管理を理解する</li> <li>3. 脳機能障害を有する対象者に対する運動療法を知る</li> <li>4. 脳機能障害を有する対象者に合併しやすい症状と理学療法を知る</li> </ol>
授業計画	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 脳機能障害の一次性 impairments と二次性 impairments</li> <li>2. 脳機能障害の評価（運動機能評価と総合評価）</li> <li>3. 脳機能障害の評価（バランス評価と歩行評価）</li> <li>4. 脳機能障害の評価（基本動作と ADL）</li> <li>5. その他の評価（評価学の復習を兼ねて）</li> <li>6. 脳機能障害の病態とリスク管理</li> <li>7. 急性期の理学療法</li> <li>8. 脳機能障害者の理学療法に必要な歩行補助具と補装具の理解</li> <li>9. 脳機能障害者に対する立位・歩行練習～意義と方法～</li> <li>10. 脳機能障害者に対する課題志向型アプローチと運動学習の進め方</li> <li>11. 高次脳機能障害と理学療法士のかかわり（1）</li> <li>12. 高次脳機能障害と理学療法士のかかわり（2）</li> <li>13. 脳機能障害における合併症と理学療法</li> <li>14. 症例から学ぶ</li> <li>15. 症例から学ぶ</li> </ol>
教科書	『標準理学療法学 神経理学療法学第2版』
参考文献	『脳卒中理学療法の理論と技術』/原寛美, 吉尾雅春編/メジカルビュー 『ここがポイント! 脳卒中の理学療法/河村廣幸編/金原出版 『標準理学療法学 運動療法総論第4版』/医学書院 その他、随時講義内に紹介します。
成績評価	講義内で行う小テスト、前期試験、講義内課題等で判定します。 受講にあたって、予習・復習を十分行うこと。

科 目 名	内部障害理学療法
担 当 教 員	井坂 昌明
単位、必修・選択	1単位 必修
履修対象・形態	3年次 後期 講義
授 業 科 目 概 要	内部障害の中核を担う呼吸、循環、代謝障害等の評価理論を背景に、理学療法プログラムについて習得することを目標とする。 内部障害に対する理学療法について、その特徴及びリスク管理について解説する。
授 業 の 目 的	主な内部障害疾患に関する基礎知識を学び、各疾患特性に応じた理学療法の理解を目的とする。 内部障害に対する理学療法について、その特徴及びリスク管理についての意義を理解することを目標とする。
授 業 計 画	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 心疾患（心筋梗塞、心不全等）の理解①</li> <li>2. 心疾患（心筋梗塞、心不全等）の理解②</li> <li>3. 心疾患（大動脈、末梢動脈等）の理解①</li> <li>4. 心疾患（大動脈、末梢動脈等）の理解②</li> <li>5. 呼吸器疾患（閉塞性・拘束性・外科術後）の理解①</li> <li>6. 呼吸器疾患（閉塞性・拘束性・外科術後）の理解②</li> <li>7. 代謝疾患の理解と主な疾患（糖尿病等）の理解①</li> <li>8. 代謝疾患の理解と主な疾患（糖尿病等）の理解②</li> </ol>
教 科 書	『呼吸・心臓リハビリテーション』/高橋哲也、間瀬教史編著/羊土社/2013年 『内部障害リハのための胸部・腹部画像読影のすすめ』美津島 隆、山内克哉 監修/メジカルビュー社/2017年
参 考 文 献	『理学療法診療ガイドライン』日本理学療法士協会 編/株ガイアブックス/2015年 『初学者のための呼吸理学療法テキスト』/堀竜次 編集/メディカ出版/2010年
成 績 評 価	後期試験、課題レポート、出席、授業態度等から総合的に評価する。 受講にあたって、予習復習を必ず行うこと。

科 目 名	内部障害理学療法演習
担 当 教 員	井坂 昌明
単位、必修・選択	1単位 必修
履修対象・形態	3年次 後期 演習
授 業 科 目 概 要	内部障害評価法および内部障害理学療法で学んだ病態と症状から、機能評価、運動機能評価、理学療法プログラムと理学療法技術について習得することを目標とする。 運動療法を進めるにあたり、内部障害によるリスク管理の重要性を解説する。
授 業 の 目 的	内部障害における基礎知識を学び、各疾患に応じた理学療法を理解し、リスク管理のもと適切な運動処方ができることを目的とする。 最終的には実習および国家試験において、必要な知識や能力の習得を目標とする。
授 業 計 画	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 理学療法の一般原則</li> <li>2. 心疾患における理学療法①</li> <li>3. 心疾患における理学療法②</li> <li>4. 心疾患における理学療法③</li> <li>5. 心疾患における理学療法④</li> <li>6. 呼吸器疾患における理学療法①</li> <li>7. 呼吸器疾患における理学療法②</li> <li>8. 呼吸器疾患における理学療法③</li> <li>9. 呼吸器疾患における理学療法④</li> <li>10. 事例検討①</li> <li>11. 事例検討②</li> <li>12. 急変時の対応(心肺蘇生法)</li> <li>13. 糖尿病における理学療法の関わり</li> <li>14. 在宅における理学療法の関わり</li> <li>15. 内部障害理学療法のまとめ</li> </ol>
教 科 書	『呼吸・心臓リハビリテーション』/高橋哲也、間瀬教史編著/羊土社/2013年 『内部障害リハのための胸部・腹部画像読影のすすめ』美津島 隆、山内克哉 監修/メジカルビュー社/2017年
参 考 文 献	『リハビリテーション基礎評価学』/潮見泰蔵 下田信明 編集/羊土社/2015年 『PT・OT ビジュアルテキスト 内部障害理学療法学』/松尾善美 編集/羊土社/ 2016年 『理学療法診療ガイドライン』日本理学療法士協会 編/株ガイアブックス/2015年
成 績 評 価	後期試験、課題レポート、出席、授業態度等から総合的に評価する。 受講にあたって、予習復習を必ず行うこと。

科 目 名	発達障害理学療法
担 当 教 員	紀伊 克昌、堅田 志保、吉田 真司、上村 奈々恵
単位、必修・選択	1単位 選択
履修対象・形態	3年次 後期 演習
授 業 科 目 概 要	<p>代表的小児疾患を中心に、発達障害の特徴と基本的な評価方法や問題の捉え方を学び、運動療法を主とした理学療法手技について習得することを目的とする。特に、発達障害の評価方法の実技、脳性麻痺児のタイプ別理学療法、両親の関わりを含めた環境設定等についても学習し、系統的な理学療法が実践できるよう教授する。</p>
授 業 の 目 的	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 小児疾患の治療を理論的に推論し解釈する</li> <li>2. 代表的な小児疾患を中心に発達障害の基本的な問題の捉え方と理学療法の展開について理解する</li> <li>3. 姿勢コントロールと随意運動コントロール評価と分析を習得する</li> </ol>
授 業 計 画	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. ボバース概念の創始と変遷</li> <li>2. 脳性麻痺治療におけるシステム理論の理解 (求心性システムと遠心性システム)</li> <li>3. 脳性麻痺治療につながる正常発達の理解</li> <li>4. 脳性麻痺と脳血管障害の治療における共通点</li> <li>5. 実技 姿勢コントロールの理解 体幹のコントロール (骨盤の選択的運動・肩甲帯の選択的運動・多関節の運動連鎖)</li> <li>6. 実技 姿勢コントロールの理解 体幹のコントロール (骨盤の選択的運動・肩甲帯の選択的運動・多関節の運動連鎖)</li> <li>7. 実技 姿勢コントロールと随意運動コントロールの理解 (効率的な運動)</li> <li>8. 脳性麻痺のタイプによる治療の理解</li> <li>9. 実技 痙直型四肢麻痺の治療</li> <li>10. 実技 痙直型両麻痺の治療</li> <li>11. 実技 片麻痺の治療</li> <li>12. 実技 低緊張、失調の治療</li> <li>13. 実技 アテトーゼの治療</li> <li>14. 成人脳血管疾患の治療の理解・実技 片麻痺の治療</li> <li>15. 実際の治療から考える</li> </ol>
教 科 書	『理学療法ハンドブック』/協同医書
参 考 文 献	『脳麻痺の運動障害』/医歯薬出版 『片麻痺の評価と治療』/医歯薬出版 『脳性まひの類型別運動発達』/医歯薬出版 『英国ボバース講師会議によるボバース概念』/ガイアブックス
成 績 評 価	後期試験（筆記試験）とレポート 受講にあたって、予習・復習を十分行うこと。



科 目 名	神経筋障害理学療法
担 当 教 員	鎌田 理之、加藤 直樹
単位、必修・選択	2単位 必修
履修対象・形態	3年次 後期 講義
授 業 科 目 概 要	神経、筋に関する解剖、生理、運動学の復習、各疾患の特徴（神経内科学）を振り返り、理学療法（運動療法）が適応となる問題点を現在の医学で考え得るレベルで明確にし、理学療法技術へと進める。また神経筋疾患は治癒不可能な難病が多いため、理学療法だけにとどまらず、リハビリテーション医療の観点から種々のアプローチについても、症例提示・検討等も交えながら紹介する。
授 業 の 目 的	神経筋疾患や難病に対する障害の評価と基本的な理学療法、具体的には、①神経筋障害に関する基本的な知識、②神経筋障害の評価方法、③神経筋障害別理学療法、④特に難病に対しては医学的リハビリテーションの観点に基づいた理学療法、⑤生活活動能力や機能的予後、リスク管理等を学習することを目的とする。
授 業 計 画	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 神経筋疾患の理学療法総論</li> <li>2. 運動失調症に対する理学療法：脊髄小脳変性症を中心に①</li> <li>3. 運動失調症に対する理学療法：脊髄小脳変性症を中心に②</li> <li>4. パーキンソン病（症候群）に対する理学療法①：総論（臨床経過、重症度）</li> <li>5. パーキンソン病（症候群）に対する理学療法②：障害像の把握、評価</li> <li>6. パーキンソン病（症候群）に対する理学療法③：目標設定、プログラム</li> <li>7. 運動ニューロン疾患に対する理学療法：筋萎縮性側索硬化症（ALS）を中心に①</li> <li>8. 運動ニューロン疾患に対する理学療法：筋萎縮性側索硬化症（ALS）を中心に②</li> <li>9. 末梢神経障害に対する理学療法：総論、単ニューロパチー</li> <li>10. 末梢神経障害に対する理学療法：多発ニューロパチー</li> <li>11. 筋疾患に対する理学療法：筋ジストロフィー症</li> <li>12. 筋疾患に対する理学療法：筋炎</li> <li>13. 症例提示</li> <li>14. その他（トピックス紹介など）</li> <li>15. 総括</li> </ol>
教 科 書	『ベッドサイドの神経の診かた 第18版』/田崎義昭、斉藤佳雄 著/南江堂/2016年
参 考 文 献	<p>(雑誌)『Journal of Clinical Rehabilitation』/医歯薬出版</p> <p>『ヒトの動きの神経科学』/松村道一、小田伸午 監訳/市村出版/2002年</p> <p>『標準理学療法学・作業療法学 神経内科学 第4版』/医学書院/2013年</p> <p>『標準理学療法学専門分野 神経理学療法学』/吉尾雅春 編/医学書院/2013年</p> <p>『パーキンソン病の理学療法』/奈良勲 監修、松尾善美 編/医歯薬出版/2011年</p>
成 績 評 価	後期試験、小テスト等により総合評価する。 受講にあたって、予習・復習を十分行うこと。

科 目 名	脊髄障害理学療法
担 当 教 員	鎌田 理之、加藤 直樹
単 位、必 修・選 択	1 単 位 必 修
履 修 対 象・形 態	3 年 次 後 期 講 義
授 業 科 目 概 要	脊髄に関する解剖、生理学の復習、疾患の特徴を振り返り、理学療法（運動療法）が適応となる問題点を現在の医学で考え得るレベルで明確にし、理学療法技術へと進める。また脊髄疾患の機能予後予測に合わせて、理学療法だけにとどまらず、リハビリテーション医療の観点から種々のアプローチについても、症例提示・検討等も交えながら紹介する。
授 業 の 目 的	脊髄損傷を主とした脊髄疾患に対する障害の評価と基本的な理学療法、具体的には、①脊髄障害に関する基本的な知識、②脊髄障害の評価方法、③脊髄損傷（疾患）の障害別・病期別理学療法、④生活活動能力や機能的予後、リスク管理等を学習することを目的とする。
授 業 計 画	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 脊髄障害理学療法総論</li> <li>2. 脊髄損傷に対する理学療法： 疫学、神経合併症など</li> <li>3. 脊髄損傷に対する理学療法： 総合評価(ASIA)、機能予後予測など</li> <li>4. 脊髄損傷に対する理学療法： 急性期の理学療法（呼吸理学療法含む）</li> <li>5. 脊髄損傷に対する理学療法： 回復期の理学療法</li> <li>6. 脊髄損傷に対する理学療法： 不全脊髄損傷に対する理学療法</li> <li>7. 脊髄障害に対する理学療法： 多発性硬化症、脳腫瘍（脊髄腫瘍など）</li> <li>8. その他（トピックス紹介など）、総括</li> </ol>
教 科 書	動画で学ぶ脊髄損傷のリハビリテーション/田中宏太佳ら 編/医学書院/2010 年
参 考 文 献	『脊髄損傷理学療法マニュアル 第2版』/岩崎洋 編/文光堂/2014 年 『PT マニュアル 脊髄損傷の理学療法 第3版』/武田功 編著/2017 年 『神経筋疾患・脊髄損傷の呼吸リハビリテーションガイドライン』/日本リハビリテーション医学会 監/ <a href="http://www.jarm.or.jp/wp-content/uploads/file/member/member_publication_isbn9784307750400.pdf">http://www.jarm.or.jp/wp-content/uploads/file/member/member_publication_isbn9784307750400.pdf</a> （最終閲覧日:2019年2月27日）
成 績 評 価	後期試験、小テスト等により総合評価する。 受講にあたって予習、復習を十分行うこと。

科 目 名	地域リハビリテーション
担 当 教 員	鶴崎 智史、松尾 薫
単位、必修・選択	2単位 必修
履修対象・形態	3年次 前期 講義
授 業 科 目 概 要	病院など医療機関での治療から、施設や在宅での継続的な医療や介護保険の領域、介護予防にまでひろがる理学療法士の役割と意義を学習する。地域リハビリテーションの基本的な概念、用語を理解する。疾患の回復期から維持期のとらえ方を理解し、理学療法士以外の職種との連携を密にしてリハビリテーションチームとして、さらに地域社会も含めた対象者やその家族への心身への関わりを具体的に学習する。
授 業 の 目 的	障害の発症から維持期に至るまで、障害とともに、住み慣れた地域で生活していくうえで一貫した理学療法が行われることが必要である。また、その時期に応じた理学療法が求められる。在宅生活の継続、地域での生活という意識の一般化に対して、制度や機関も整備されつつある。同時に、理学療法士も、地域の中で生活するための援助としての理学療法のあり方を学ぶ必要がある。
授 業 計 画	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 地域リハビリテーションの総論。(鶴崎)</li> <li>2. 地域理学療法の概念。(鶴崎)</li> <li>3. 地域理学療法の関連制度と関連法規。(鶴崎)</li> <li>4. 住宅環境整備とリスクマネジメント。(鶴崎)</li> <li>5. 予防理学療法。(鶴崎)</li> <li>6. 訪問リハビリ(理学療法)の展開について、事例を扱いながら学ぶ①。(鶴崎)</li> <li>7. " " " " ②。(鶴崎)</li> <li>8. " " " " ③。(鶴崎)</li> <li>9. " " " " ④。(鶴崎)</li> <li>10. 通所リハビリテーション施設を通じた、地域社会におけるリハビリテーションの役割を解説する。(松尾)</li> <li>11. 個人対応と集団対応について運動療法の展開について学ぶ。生活習慣病対策、ターミナルケアと運動療法について理解する。(松尾)</li> <li>12. 地域における連携において特に在宅への準備について、カンファレンス、自宅への訪問、住宅改造、社会資源の活用について学ぶ。(松尾)</li> <li>13. 地域における連携での特に施設の取り組みについて、施設間連携、介護予防事業所との連携について扱う。(松尾)</li> <li>14. 生活環境の整備(住宅改修、福祉用具)について事例から理解を深める。(松尾)</li> <li>15. 総括(鶴崎)</li> </ol>
教 科 書	『PT・OT ビジュアルテキスト 地域理学療法学』/重森健太(編)/羊土社/2015
参 考 文 献	なし
成 績 評 価	前期試験評定する。 十分な予習と復習をして授業を受講すること。

科 目 名	老年期障害理学療法
担 当 教 員	水野 稔基
単位、必修・選択	1単位 必修
履修対象・形態	3年次 後期 演習
授 業 科 目 概 要	老化によって身体には形態的、機能的側面に変化が生じる。本演習では、老人疾患にみられる症状、病態、予後の理解をはじめ、特有な姿勢の変化と運動機能、心肺機能、日常生活機能、精神機能などの障害とそれぞれの障害の評価法と老年者の障害に対する理学療法を習得する。
授 業 の 目 的	老年期の障害の評価に基づいて、老人の生活自立に向けた系統的な健康管理や地域参加を促進するため、医学的管理下に運動療法などの理学療法技術を実践できるように演習する。
授 業 計 画	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 総論</li> <li>2. 廃用症候群</li> <li>3. 退院支援</li> <li>4. 在宅における全身管理とリハビリテーション</li> <li>5. 終末期リハビリテーション</li> <li>6. 高齢者のがんリハビリテーション</li> <li>7. 併存疾患と管理①（糖尿病，慢性腎臓病，腎不全）</li> <li>8. 併存疾患と管理②（心不全，抹消動脈疾患）</li> <li>9. 併存疾患と管理③（認知症，せん妄）</li> <li>10. リスク管理①（意識障害，血圧変動，不整脈，めまい）</li> <li>11. リスク管理②（浮腫，脱水，消化器疾患，悪心・嘔吐）</li> <li>12. 高齢者に多い問題①（低栄養，嚥下障害）</li> <li>13. 高齢者に多い問題②（排尿障害，感染症・発熱）</li> <li>14. 症例検討</li> <li>15. 総括</li> </ol>
教 科 書	『高齢者のリハビリテーション実践マニュアル』/宮越浩一 編/MEDICAL VIEW/2014
参 考 文 献	なし
成 績 評 価	後期試験により評定する。授業に際しては十分な予習と復習をすること。

科 目 名	スポーツ傷害理学療法
担 当 教 員	松尾 高行
単 位、必 修・選 択	1 単 位 選 択
履 修 対 象・形 態	3 年 次 後 期 演 習
授 業 科 目 概 要	スポーツ活動中に生じたスポーツ傷害に対する理学療法を学ぶことを目標とする。スポーツ傷害とその評価、理学療法の意義、適切な運動と禁忌、スポーツ傷害の予防方法などについて学習する。スポーツリハビリテーションチームの一員としてスポーツ分野で理学療法士が活躍するためには何が必要なのかを事例を挙げて教授する。
授 業 の 目 的	スポーツ傷害における評価と理学療法を学ぶことを目的とする。評価、理学療法の方法を講義、演習にてスポーツ傷害に対する一連の流れを習得する。
授 業 計 画	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. スポーツ傷害理学療法学総論</li> <li>2. 各論：【頸部】バーナー症候群・頸椎捻挫</li> <li>3.           :【肩関節】腱板損傷・投球障害肩・肩関節脱臼</li> <li>4.           :【肘関節】投球障害肘・テニス、ゴルフ肘</li> <li>5.           :【手関節】TFCC 損傷</li> <li>6.           :【腰部】腰痛症・椎間板ヘルニア・腰椎分離症・腰椎すべり症</li> <li>7.           :【股関節・大腿】股関節インピンジメント (FAI)・肉離れ</li> <li>8.           :【膝関節】前十字靭帯損傷・後十字靭帯損傷・内側側副靭帯損傷</li> <li>9.           :【膝関節】半月板損傷・過度の使用による障害</li> <li>10.          :【足関節】内反捻挫・過度の使用による障害</li> <li>11.          :【スポーツ傷害予防】</li> <li>12. 演習：【テーピング】上肢・膝関節</li> <li>13. 演習：【テーピング】足関節</li> <li>14. 演習：【メディカルリハビリテーション】</li> <li>15. 演習：【アスレティックリハビリテーション】</li> </ol>
教 科 書	『スポーツ理学療法』/三輪書店/2019 年出版予定
参 考 文 献	『Skill Up 下肢スポーツ外傷のリハビリテーションとリコンディショニング』 文光堂/2011 年 『実践 PT ノート運動器疾患の理学療法第 2 版』/三輪書店/2011 年 『アスリートケアマニュアル テーピング』/文光堂/2010 年 『アスリートケアマニュアル ストレッチング』/文光堂/2007 年 『スポーツ膝の臨床 第 2 版』/金原書店/2014 年
成 績 評 価	後期試験、課題レポートにより総合評価する。 講義に関して予習・復習を十分行うこと。

科 目 名	理学療法特論
担 当 教 員	椎木 孝幸、南野 博紀、木村 佳記、池田 耕二
単位、必修・選択	1単位 選択
履修対象・形態	4年次 後期 講義
授 業 科 目 概 要	近年、理学療法は様々な分野にて発展し、理学療法士の活躍の場、役割は拡大し、多岐にわたる知識・技術が必要となっている。また、卒業後、臨床にて理学療法業務を行う上で、社会制度の変革に応じた管理業務が求められる。臨床経験の豊富な理学療法士より実践的な理学療法を教授する。
授 業 の 目 的	実践的な理学療法の技術・知識を習得する 理学療法管理業務について理解する 卒業後のキャリアデザインをする
授 業 計 画	1. 理学療法管理業務 (椎木) 2. 生涯学習プログラム (椎木) 3. 障害者スポーツ支援1 (南野) 4. 障害者スポーツ支援2 (南野) 5. 科学的根拠に基づいた運動療法 (木村) 6. 超音波エコーを用いた理学療法評価 (木村) 7. がんのリハビリテーション (池田) 8. 終末期理学療法 (池田)
教 科 書	適時資料を配布する。
参 考 文 献	なし
成 績 評 価	レポート課題によって評価する。 受講にあたって、予習・復習を十分行うこと。

科 目 名	義肢補装具学
担 当 教 員	助川 明、大垣 昌之、高木 啓至
単 位、必 修・選 択	2 単 位 必 修
履 修 対 象・形 態	3 年 次 後 期 講 義
授 業 科 目 概 要	運動器障害に対する能力障害を補完する手段である義肢補装具を学ぶ。頸部から足部までの身体の全領域にわたる義肢補装具の基本から研究まで幅広く知識を得るように講義する。適合判定や切断術の術前と術直後の訓練方法、装着方法や装着時の問題点抽出、障害別適応を講義し、実技をまじえて教授する。
授 業 の 目 的	運動器障害の代替手段である義肢補装具を具体的に学ぶことで理学療法が幅広く拡大する事を目的とする。各障害に適応する義肢、装具、自助具の実践的な理学療法での活用方法を理解する。
授 業 計 画	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 切断と義肢の基礎知識 アライメントの概念 (助川)</li> <li>2. 大腿義足・下腿義足 (助川)</li> <li>3. 下肢切断と義足装着前理学療法 (助川)</li> <li>4. 義足装着理学療法と応用動作 (助川)</li> <li>5. 義手と上肢切断 (助川)</li> <li>6. 上肢装具と自助具、車椅子、歩行補助具 (助川)</li> <li>7. 装具使用によるエビデンス (大垣) ※演習形式</li> <li>8. 装具の臨床活用 (大垣) ※演習形式</li> <li>9. 装具検討の実際 1 (大垣) ※演習形式</li> <li>10. 装具検討の実際 2 (大垣) ※演習形式</li> <li>11. 回復期・生活期の装具の実際 (大垣) ※演習形式</li> <li>12. 大腿切断：大腿義足の構造および異常歩行 (高木) ※演習形式</li> <li>13. 大腿切断：断端管理 (弾性包帯・断端機能トレーニング) (高木) ※演習形式</li> <li>14. 大腿切断：模擬義足を用いた義足歩行の体験 (高木) ※演習形式</li> <li>15. 義肢装具の支給体系とチームアプローチ (助川)</li> </ol>
教 科 書	『義肢装具のチェックポイント 第8版』/医学書院 『理学療法 MOOK17 理学療法技術の再検証』/三輪書店
参 考 文 献	『義肢装具学 第4版』/川村次郎ほか 編/医学書院 必要な資料を当日配布いたします。
成 績 評 価	後期試験 (筆記試験) とレポート、出席カードへの丁寧な記載および授業態度を総合的に判定する。 受講にあたって、予習・復習を十分行うこと。

科 目 名	理学療法学総合演習 I
担 当 教 員	松野 悟之、鶴崎 智史、栗田 剛寧、国宗 翔、水野 稔基
単位、必修・選択	1 単位 必修
履 修 対 象 ・ 形 態	3 年次 前期 演習
授 業 科 目 概 要	理学療法の評価過程に必要な情報収集と検査・測定技術の向上を目的として、既修範囲の復習と、疾患を想定した評価過程を学習する。実技の演習を中心とし、様々な障害の評価を対象者に合わせて立案、実施できるように思考過程の整理をあわせて行う。
授 業 の 目 的	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 身体機能の評価について、既修範囲を復習し、実践能力を高める</li> <li>2. 疾患を想定し、検査・測定を実施できるようになる</li> <li>3. 検査の意義を理解し、各障害に関する知識を統合する</li> <li>4. 動作観察から問題点を想起できるようになる</li> </ol>
授 業 計 画	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 情報収集・画像評価</li> <li>2. 神経学的検査 高次脳機能障害の評価</li> <li>3. 神経学的検査 反射・筋緊張・片麻痺の運動検査</li> <li>4. 関節の評価 上肢・下肢・体幹</li> <li>5. 関節の評価 上肢・下肢・体幹</li> <li>6. 関節の評価 上肢・下肢・体幹</li> <li>7. 筋力の評価 徒手筋力検査 上肢・体幹</li> <li>8. 筋力の評価 徒手筋力検査 下肢</li> <li>9. 筋力の評価 異常歩行 その他</li> <li>10. 運動失調の評価と治療</li> <li>11. 運動失調の評価と治療</li> <li>12. 運動失調の評価と治療</li> <li>13. 動作観察・動作分析</li> <li>14. 動作観察・動作分析</li> <li>15. 動作観察・動作分析</li> </ol>
教 科 書	『標準理学療法学 神経理学療法学』/医学書院/吉尾雅春 編 『動作分析臨床活用講座』/石井慎一郎/メジカルビュー
参 考 文 献	『標準理学療法学 理学療法評価学 第2版』/医学書院/内山靖 編
成 績 評 価	前期試験、実技試験を総合して評価する。 講義に関して、十分な予習と復習をすること。



科 目 名	理学療法学総合演習Ⅱ
担 当 教 員	松野 悟之、濱岡 克伺、鶴崎 智史、山野 宏章、国宗 翔、水野 稔基
単位、必修・選択	1単位 必修
履修対象・形態	3年次 後期 演習
授 業 科 目 概 要	学内授業で習得した各障害の理学療法の知識や技術を統合し、主要な疾患を中心に、障害レベルに応じた理学療法の目標と治療プログラムの立案と具体的な実施方法について学習することを目的とする。効果的な理学療法（治療）を実施するため、模擬症例やグループ学習を多く取り入れ、思考能力と実践力を養う。
授 業 の 目 的	<ol style="list-style-type: none"> <li>1) 理学療法評価学で学んだ評価項目の意義を理解し、動作と検査結果等を結びつけることができる</li> <li>2) 基本動作の誘導および介助から動作の評価ができるようになる</li> <li>3) 基本的な症例の評価項目を抽出し、統合と解釈を実施することができる</li> <li>4) 評価過程をまとめ、報告書を作成できる</li> <li>5) 治療過程で再評価を行い、思考を振り返ることができる</li> </ol>
授 業 計 画	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 実習における症例レポート・サマリー（レジュメ）の作成手順</li> <li>2. 症例の評価の立案、動作観察・動作分析、統合と解釈、治療プログラム立案</li> <li>3. 症例の評価の立案、動作観察・動作分析、統合と解釈、治療プログラム立案</li> <li>4. 症例の評価の立案、動作観察・動作分析、統合と解釈、治療プログラム立案</li> <li>5. 症例の評価の立案、動作観察・動作分析、統合と解釈、治療プログラム立案</li> <li>6. 症例の評価の立案、動作観察・動作分析、統合と解釈、治療プログラム立案</li> <li>7. 症例の評価の立案、動作観察・動作分析、統合と解釈、治療プログラム立案</li> <li>8. 症例の評価の立案、動作観察・動作分析、統合と解釈、治療プログラム立案</li> <li>9. 症例の評価の立案、動作観察・動作分析、統合と解釈、治療プログラム立案</li> <li>10. 症例の評価の立案、動作観察・動作分析、統合と解釈、治療プログラム立案</li> <li>11. 症例の評価の立案、動作観察・動作分析、統合と解釈、治療プログラム立案</li> <li>12. 症例の評価の立案、動作観察・動作分析、統合と解釈、治療プログラム立案</li> <li>13. 症例の評価の立案、動作観察・動作分析、統合と解釈、治療プログラム立案</li> <li>14. 症例の評価の立案、動作観察・動作分析、統合と解釈、治療プログラム立案</li> <li>15. 症例の評価の立案、動作観察・動作分析、統合と解釈、治療プログラム立案</li> </ol>
教 科 書	『PT 症例レポート赤ペン添削ビフォー&アフター』/相澤純也 他・編/羊土社 『動作分析臨床活用講座』/石井慎一郎/メジカルビュー 『脳卒中理学療法の理論と技術』 第2版/原寛美/メジカルビュー
参 考 文 献	『標準理学療法学 神経理学療法学』/医学書院/吉尾雅春 編
成 績 評 価	後期試験、実技試験、課題レポートを総合して評価する。 受講にあたって、予習・復習・実技練習を十分行うこと。

科 目 名	総括セミナー I
担 当 教 員	専任教員
単位、必修・選択	1単位 必修
履修対象・形態	4年次 前期 演習
授業科目概要	これまでの知識、技術を統括し、理学療法士国家試験対策セミナーを実施する。セミナーを受講し、自己学習、グループワークを円滑に実施するために、学習習慣、方法を習得する。グループワークにより、理解度の向上・学習の効率化を図る。
授業の目的	1. 理学療法士国家試験に向け、対策方法を十分に理解、習得し、グループワークを積極的に行うようになること。 2. 具体的な実施計画を立案し、到達目標を明確にすること。
授業計画	<p>前期期間を通じて、以下の事項を実施する。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 専門基礎分野を中心に国家試験過去問題・類似問題を解き、出題傾向と対策の要点を教授する。</li> <li>2. 少人数のグループワークを実施し、知識の補充を図る。</li> <li>3. 個々の年間スケジュールを立案し、到達目標を設定する。</li> <li>4. 学習習慣、学習方法を確立する。</li> <li>5. 専任教員による定期的な面談を実施し、状況を把握し、学習指導を実施する。</li> </ol>
教科書	理学療法士・作業療法士国家試験必修ポイント/医歯薬出版株式会社 専門基礎分野 基礎医学 2019 専門基礎分野 臨床医学 2019 基礎PT学 2019 障害別PT治療学 2019
参考文献	適宜配布
成績評価	課題提出、前期試験により総合的に評価する。 受講にあたって、該当分野の予習・復習を十分行うこと。

科 目 名	総括セミナーⅡ
担 当 教 員	専任教員
単位、必修・選択	1単位 必修
履修対象・形態	4年次 後期 演習
授 業 科 目 概 要	これまでの知識、技術を統括し、理学療法士国家試験対策セミナーを実施する。 セミナーⅠを発展させ、理学療法専門分野を中心に対策セミナーを実施する。
授 業 の 目 的	1. 理学療法士国家試験に向け、対策方法を十分に理解、習得し、グループワークを積極的に行うようになること。 2. 専門基礎分野と専門分野を関連づけ、総合的に学習できること。
授 業 計 画	<p>後期期間を通じて、以下の事項を実施する。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 専門分野を中心に国家試験過去問題・類似問題を解き、出題傾向と対策の要点を教授する。</li> <li>2. 少人数のグループワークを実施し、知識の補充を図る。</li> <li>3. 専門基礎分野と専門分野を関連づけ、実地問題に対する応用力を習得する。</li> <li>4. 専任教員による定期的な面談を実施し、状況を把握し、学習指導を実施する。</li> </ol>
教 科 書	特に指定なし。
参 考 文 献	適宜配布
成 績 評 価	課題提出、後期試験により総合的に評価する。 受講にあたって、該当分野の予習・復習を十分行うこと。

科 目 名	理学療法研究
担 当 教 員	幸田 利敬、松田 淳子、松尾 高行、藤田 信子、池田 耕二
単位、必修・選択	2単位 選択
履修対象・形態	4年次 前期 講義
授 業 科 目 概 要	<p>担当教員の指導により、個人またはグループで研究課題を設定し、文献検索、研究方法の選択や研究計画を立て、関連する情報収集・分析を進め、考察に至るまでの過程を経験する。</p> <p>12月に抄録提出、1月に発表を予定している。</p> <p>理学療法士に必要な総合的知識の獲得をめざす。</p>
授 業 の 目 的	<p>理学療法研究では、具体的なテーマをもとに自ら研究する姿勢と能力を養うこと、また理学療法士として必要な知識を探求し、補充することを目的とする。</p> <p>将来、研究活動を行うことを想定し、プレゼンテーション技術も身につける。</p>
授 業 計 画	<p>4月に各教員より、研究指導テーマを公表する。</p> <p>学生の希望テーマ及び教員をもとに、学生－教員のマッチングを行う。</p> <p>ゼミ活動は各担当教員と学生との打ち合わせの上、研究指導などのスケジュールを決める。</p>
教 科 書	なし
参 考 文 献	なし
成 績 評 価	抄録、発表内容、活動内容などにより総合的に評価する。

科 目 名	臨床体験実習
担 当 教 員	幸田 利敬、松田 淳子、松尾 高行、粕渕 賢志、助川 明、井坂 昌明、 神里 巖、松野 悟之、濱岡 克伺、鶴崎 智史、栗田 剛寧、山野 宏章、 国宗 翔、水野 稔基
単位、必修・選択	1単位 必修
履修対象・形態	2年次 前期 実習
授 業 科 目 概 要	学外施設において、1週間の臨床実習を体験し、以下のことについて学ぶ。理学療法の見学を通し、理学療法業務について学ぶ。また学生として問診の一部を体験し、接し方や問診の技術を学ぶ。さらに学内で学んだ評価や検査を実践し、身体への触れ方や評価と検査技術を学ぶ。学外施設の臨床実習指導者と本学教員が連携し臨床実習指導を行う。
授 業 の 目 的	見学を通して理学療法の意義と役割を理解する。基本的な評価や問診および業務の補助等を通して、理学療法介入について理解する。また、対象者やその家族および医療スタッフとの関わりを通して、コミュニケーション能力の向上を目指す。さらに理学療法士として今後習得しなければならない能力を認識する。
授 業 計 画	1週間を通じて、以下の事項を実施する
	理学療法業務の見学
	理学療法評価の体験
	理学療法業務の補助を体験
	各職種との連携について学習
	実習日誌の作成
	※ 学内において臨床実習に必要な知識・技術・態度を高めて臨むこと
	※ 実習前のオリエンテーションには必ず出席すること
	※ 実習へ行く前に、1学年で学習した専門基礎系の内容の確認テストに合格すること。
教 科 書	特に定めない
参 考 文 献	適宜必要な文献及び資料などを紹介する
成 績 評 価	臨床実習における知識・技能・態度と報告書の内容等を総合して評価する

科 目 名	臨床評価実習
担 当 教 員	幸田 利敬、松田 淳子、松尾 高行、粕渕 賢志、助川 明、井坂 昌明、 神里 巖、松野 悟之、濱岡 克伺、鶴崎 智史、栗田 剛寧、山野 宏章、 国宗 翔、水野 稔基
単位、必修・選択	3単位 必修
履修対象・形態	3年次 後期 実習
授業科目概要	学内で習得した知識を臨床の場で応用し、症例に応じた基本的な障害評価の方法・診断過程を経験することで、障害の種類・程度を具体的に把握する。病院または施設の臨床実習指導者が本学教員と連携し臨床実習指導を行う。
授業の目的	<ul style="list-style-type: none"> <li>・実習指導者の指導のもと、情報収集、観察、検査・測定、統合と解釈、問題点の抽出、目標設定を体験し、患者様の障害像が理解できること</li> <li>・基本的な評価技術を習得すること</li> </ul>
授業計画	3週間を通じて、以下の事項を実施する
	理学療法業務の見学
	症例の評価
	症例の治療の補助
	実習日誌と症例報告書（サマリー）の作成
	※ 学内において臨床実習に必要な知識・技術・態度を高めて臨むこと
	※ 実習前のオリエンテーションには必ず出席すること
教科書	特に定めない
参考文献	適宜必要な文献及び資料などを紹介する
成績評価	臨床実習における知識・技能・態度と報告書の内容等を総合して評価する

科 目 名	臨床総合実習 I
担 当 教 員	幸田 利敬、松田 淳子、松尾 高行、粕渕 賢志、助川 明、井坂 昌明、 神里 巖、松野 悟之、濱岡 克伺、鶴崎 智史、栗田 剛寧、山野 宏章、 国宗 翔、水野 稔基
単 位、必 修・選 択	6 単 位 必 修
履 修 対 象・形 態	4 年 次 前 期 実 験・実 習
授 業 科 目 概 要	学外の病院または施設において実施する。これまでに学習したことを臨床の場で実践し、知識・技能・態度の包括的向上を目指す。理学療法の対象となる代表的な疾患について障害評価から治療計画立案までの過程を実施できるように学習することを目的とする。また、対象者への理学療法(治療)の一部を体験する。その過程に関して根拠のある説明ができる能力を身につける。病院または施設の臨床実習指導者が本学教員と連携し臨床実習指導を行う。
授 業 の 目 的	実習指導者の指導と助言のもと、一連の理学療法プロセス(情報収集、観察、検査・測定、統合と解釈、問題点の抽出、目標設定、治療計画の立案と実施、検証)を実施できるようになること。
授 業 計 画	8週間を通じて、以下の事項を実施する
	理学療法業務の見学
	症例の評価と治療の補助
	実習日誌と症例報告書(サマリー)の作成
	※ 学内において臨床実習に必要な知識・技術・態度を高めて臨むこと
	※ 実習前のオリエンテーションには必ず出席すること
教 科 書	特に定めない
参 考 文 献	適宜必要な文献及び資料などを紹介する
成 績 評 価	臨床実習における知識・技能・態度と報告書の内容等を総合して評価する

科 目 名	臨床総合実習Ⅱ
担 当 教 員	幸田 利敬、松田 淳子、松尾 高行、粕渕 賢志、助川 明、井坂 昌明、 神里 巖、松野 悟之、濱岡 克伺、鶴崎 智史、栗田 剛寧、山野 宏章、 国宗 翔、水野 稔基
単位、必修・選択	8単位 必修
履修対象・形態	4年次 後期 実験・実習
授業科目概要	学外の病院または施設において実施する。これまでに学習したことを臨床の場で実践し、知識・技能・態度の包括的向上を目指す。理学療法の対象となる代表的な疾患について障害評価から治療計画立案までの過程を実施できるように学習することを目的とする。また、対象者への理学療法(治療)の一部を体験する。その過程に関して根拠のある説明ができる能力を身につける。病院または施設の臨床実習指導者が本学教員と連携し臨床実習指導を行う。
授業の目的	実習指導者の指導と助言のもと、一連の理学療法プロセス(情報収集、観察、検査・測定、統合と解釈、問題点の抽出、目標設定、治療計画の立案と実施、検証)を実施できるようになること。
授業計画	<p>8週間を通じて、以下の事項を実施する</p> <p>理学療法業務の見学</p> <p>症例の評価と治療の補助</p> <p>実習日誌と症例報告書(サマリー)の作成</p> <p>※ 学内において臨床実習に必要な知識・技術・態度を高めて臨むこと</p> <p>※ 実習前のオリエンテーションには必ず参加すること</p>
教科書	特に定めない
参考文献	適宜必要な文献及び資料などを紹介する
成績評価	臨床実習における知識・技能・態度と報告書の内容等を総合して評価する



## 教育課程変更に伴う 科目の読み替え

(旧)教育課程(2015年度まで)		(新)教育課程案(2016年度以降)
授業科目の名称		授業科目の名称
心理学概論	←	心理学
体育実技	←	健康スポーツ科学
健康スポーツ科学	←	健康スポーツ科学
心の健康と運動	←	心の健康と運動
人間関係論	←	人間関係学
学びと表現	←	キャリアセミナー
英語Ⅰ	←	英語コミュニケーションⅠ
英語Ⅱ	←	英語コミュニケーションⅡ
医学英語	←	医学英語
統計学	←	統計学
キャリアガイダンス	←	キャリアセミナー
キャリアセミナー	←	総括セミナーⅠ
情報処理演習	←	情報処理演習
公衆衛生学	←	公衆衛生学
生命倫理	←	生命倫理
運動器系解剖学	←	運動器系解剖学
内臓系解剖学	←	内臓系解剖学
運動器系生理学	←	運動器系生理学
内臓系生理学	←	内臓系生理学
解剖学実習	←	解剖学実習
生理学実習	←	生理学実習
人間発達学	←	人間発達学
運動学	←	運動学
病理学	←	病理学
臨床心理学	←	臨床心理学
内科学	←	内科学
整形外科学	←	整形外科学
神経内科学	←	神経内科学
精神医学	←	精神医学
小児科学	←	小児科学
救急医学	←	救急医学
老年期疾病論	←	老年期障害学
リハビリテーション医学	←	リハビリテーション医学
チーム医療論	←	チーム医療学
感染対策	←	感染対策
医療安全学	←	医療安全学

(旧)教育課程(2015年度まで)		(新)教育課程案(2016年度以降)
授業科目の名称		授業科目の名称
理学療法学概論	←	理学療法学概論
運動療法学	←	運動療法学
運動療法学演習	←	運動療法学演習
物理療法学	←	物理療法学
物理療法学演習	←	物理療法学演習
日常生活活動学	←	日常生活活動学
日常生活活動学演習	←	日常生活活動学演習
障害診断論	←	理学療法評価学
骨格系障害評価法	←	運動器障害評価法Ⅰ
筋系障害評価法	←	運動器障害評価法Ⅱ
神経系障害評価法	←	神経障害評価法
呼吸器障害評価法	←	内部障害評価法
循環代謝障害評価法	←	内部障害評価法
臨床運動学演習	←	臨床運動学演習
骨・関節障害理学療法	←	運動器障害理学療法 運動器障害理学療法演習
中枢神経障害理学療法	←	脳機能障害理学療法 脳機能障害理学療法演習
呼吸器障害理学療法	←	内部障害理学療法
循環代謝障害理学療法	←	内部障害理学療法演習
義肢補装具学	←	義肢補装具学
義肢補装具療法	←	義肢補装具学
理学療法学総合演習Ⅰ	←	理学療法学総合演習Ⅰ
理学療法学総合演習Ⅱ	←	理学療法学総合演習Ⅱ
臨床体験実習	←	臨床体験実習
臨床評価実習	←	臨床評価実習
臨床総合実習Ⅰ	←	臨床総合実習Ⅰ
臨床総合実習Ⅱ	←	臨床総合実習Ⅱ
理学療法研究論	←	理学療法研究
卒業研究	←	理学療法研究
神経筋障害理学療法	←	神経筋障害理学療法 脊髄障害理学療法